

大阪商業大学商業史博物館シンポジウム

「紀伊山地の祈りと生活」

—世界遺産登録一周年を迎えて—

基調講演 「自然と信仰の歴史遺産」 講師 三重大学名誉教授

酒井 一

シンポジウム

司 会 三重大学名誉教授

酒井 一

パネリスト 大阪商業大学教授 大学院研究科長

成田 孝三

新宮市教育委員会学芸員

山本 殖生

和歌山県教育庁文化遺産課世界遺産班班長

小田 誠太郎

総合同会 皆様たいへんお待たせいたしました。ただいまより大阪商業大学商業史博物館のシンポジウムを開催いたします。開催に先立ちまして、本学商業史博物館中野安館長よりご挨拶をさせていただきます。中野先生よろしくお願いいたします。
(拍手)

中野 本日はたいへんお忙しい中を多数ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。七〇名も参加していただければ大成功ではないかと思っていたのです。したがって資料もわずかしか用意していなかったのですが、予想外に多数の皆様方のご参加をいただきまして本当にありがとうございます。

本学の商業史博物館では、紀伊山地の霊場と参詣道がユネスコの世界遺産に登録された昨年七月、それからちょうど一周年を迎えまして、当初のブームがやや沈静化したこの機会をとらえて、この紀伊山地の霊場と参詣道の問題の深さ、それを振り返りまして、四人の先生方に多角的に掘り下げていただく、そういう企画を立ち上げました。

当初のブームのころ、いろいろなマスコミで盛んに取り上げられたと思いますが、しかし、いま改めて、あるいはこれから継続的にこういうテーマを取り上げていくというのは大変意義のある事ではないかというふうに考えております。幸いそれぞれ専門の四人の先生方、それぞれの立場から対象に切り込んでいただくということでございます。最初に基調講演、これを酒井一先生にお願いしたいと思います。

——基調講演——

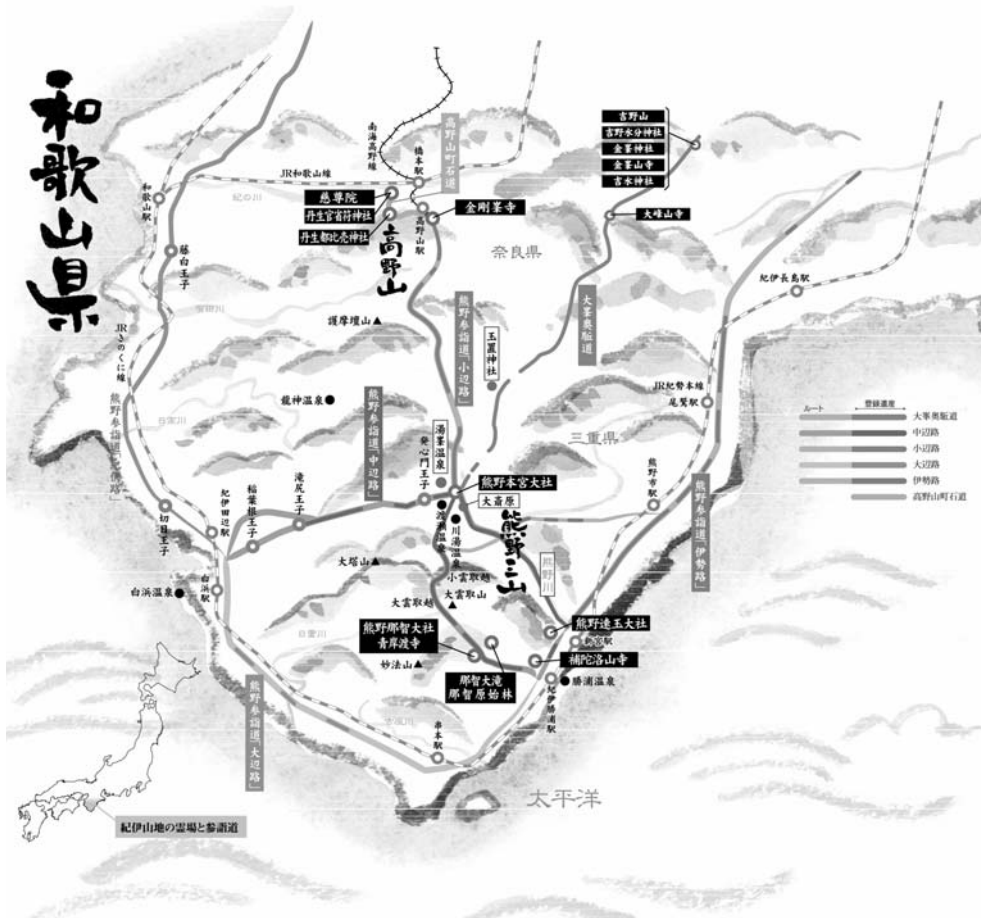
総合同会 酒井先生、壇上のほうにお上がり下さいませ。

中野 先生のご紹介を簡単にいたします。先生どうぞ。

酒井一先生は一九三一年九月にお生まれになりまして、京都大学大学院文学研究科の国史学専攻の博士課程を修了されております。専攻は日本近世・近代史でございます。その後、龍谷大学、三重大学、それから天理大学で教鞭を取られまして、現在、三重大学の名誉教授であられます。主な著書といたしましては、たくさんあるのですが、ここでは一点『街道の日本史』30東海道と伊勢湾（共著）、二〇〇四年に発行されておりまして、そのほか各種の自治体の市史といいますが、ここでは一点『街道の日本史』30東海道と伊勢湾（共著）、二〇〇四年に発行されておりまして、そのほか各種の自治体の市史といいますが、そういうものの執筆とか編さんにあたられております。

例えば堺市史、それから羽曳野市史とか、相生市史それから高槻市史という、そういう各市の市史の編さん、執筆にあたられておられます。酒井先生はすぐお分かりになると思いますが、僕も古文書の中級コースの講義を受けたのですが、非常に名調子でファンもずいぶんおられるというふうに伺っております。ぜひこの基調講演を楽しみにお聞きしたいものです。それでは先生、どうかよろしくお願ひします。

酒井 それでは、ちよつとレジュメの部数が少なかつたようでありまして、今日は七〇名近い方がおいでのようでございます。私がなぜこんな話をするかということになりますと、「あれ？」と思つてびっくりされる方も何人かいらっしゃるのではないかと思います。実は昨年の七月七日にご承知のように紀伊山地の霊場と参詣道という、たいへん特色のある場所が日本で一二番目の世界遺産として登録されたことと関係してい



世界文化遺産 紀伊山地の霊場と参詣道

ます。

今日は和歌山県のほうからお越し頂いた小田誠太郎さんと山本殖生さんは、ユネスコに書類を出すのに三県協議会や地元で为中心的に活躍された方々です。とにかく世界を相手にする訳ですからたいへんな事だと思っておりますが尽力されました。

私は、三重県の熊野のほうに紀和町という山間部がありまして、熊野市から車で三〇分ほど入った山手ではありますが、その町の歴史を調べました。旅のことも少し調べていたし、それで東紀州、江戸時代は三重県の一部も紀州の国に属していますが、それで三重県が「お前はさほうの事を少しやっているから」ということで、和歌山・三重・奈良の三県の協議会に私を送り出してきたという事になるかと思えます。実際はこの登録に関しましては和歌山県が最も精力的に知事を先頭に取り組まれたと思えます。その仕掛け人が小田さんたちで、後ほどお話をいただくことになるかと思えます。

そういう訳で、商大の商業史博物館館長の中野先生からお話がありましたけれども、ちょうど一年でマスコミのほうは次に知床を登場させ始めて

います。それで、日本人は何か一つ済んだらすぐ次に移り変わるといふ特徴というか、国民性があるようで、やはり一つ決めた事はきちっと育てていかなければいけないのではないかとこの事で、今回、商大さんのほうでこれを企画されたように思います。

私は三〇分ほどお話の時間を頂きたいと思います。ユネスコ世界遺産条約 (Convention Concerning the Protection of the World Cultural and National Heritage) というのがあります。ちょっと横文字で書いてありますので、嬉しがっているのかと思われそうですが、ともかく世界的勝負をしなければいけない訳ですから。日本の中でこれが良いと頑張ったところで、世界で認定されないといけない。その認定・登録の仕方、私なりの世界遺産のユネスコ側の意図を、自分だったらこうだという点の一つ、それから今日先生方からお話をいただく、この地域に世界遺産を持っている事の意味を考えたいと思います。

登録の義務 1) protect and conserve the World Heritage Sites in its territory

2) cooperate in other countries, in particular by educational and information programs, to strengthen appreciation and respect of the World Heritage

それで、横文字が書いてあるので恐縮なのですが、条約と言いますと、*treaty*と本来はいうのです。日本とアメリカの日米安全保障条約は *treaty* というのですけれども、ユネスコは *convention* と呼んでいるのです。協約みたいなものです。条約というか協約みたいな、恐らく国会で掛ける時に参議院と衆議院と意見が違つてというような事にならないものだと思います。国会に掛けなくてもいいのでしょうか。

だから外国の本格的な、国と国との条約であつたら国会で審議します。一九六〇年に衆議院と参議院でものすごくもめました。ああいうのは違う。だから *convention* という、国際協約ということ。協約というとか気が抜けるような感じがするので、条約と訳されたと思いますが、よく見ますと文化 (cultural) と書いてあります。それから後ろのほうに *natural*。これは文化遺産と *natural* ですから自然の *heritage* とあるその前に *protection* と書いてあります。これは保護するということ。つまり登録されて喜んでいる場合ではないのです。これをどう継いでいくかという責任が、条約にこめられています。「このことを忘れちゃいけないぞ」という感じですね。「未来の世代に引き継ぐべき」、私の好きな言葉の、「人類共通の宝物である」。日本の宝であると同時に人類共通の宝である。

それで、ここで感じるの、一九七二年に世界遺産条約がユネスコの総会で採択された。ユネスコというのは国連の機構です。私の好きなもの一つは、ユニセフというものです。よく「寄付をお願いします」と来ますが、黒柳徹子さん、アグネス・チャンさんがユニセフ親善大使で

しょう。終身の大使です。同じUNの組織の一つで、ここではユニセフは子どもたちを守る。ユネスコは教育、文化等々を守るということです。これは常任理事国に入るといって政治の話ではなくてもっと大きな問題です。人類というのは政治が変わっても文化は続くのですから。こういう観点で世界遺産が決められているということだと思います。

横文字で言いますと遺産のことを *heritage* と言います。私はさつそく英語の辞書を引つ張り出して見ましたら、*heritage* というのは日本だったら遺産であり、親の遺産も入ります。入るけれども本来は、これはキリスト教の聖書に出てくる言葉なのです。キリスト教の場合はちよつと難しい英語を使いますが、*God's heritage* という神の遺産です。だから神が遺産を決めているので、神の遺産とは何かというと一つはイスラエル人です。つまりユダヤ人です。ユダヤ人は自分が神の遺産であるといいます。これが一つです。

それが発展してキリスト教徒が神の遺産となる。だからこの *heritage*、遺産という言葉は、私は本来キリスト教、またはユダヤ教の世界から出して来た言葉だろうと思うのです。それが世界の共通認識として、キリスト教ともユダヤ教とも関係のない日本の宗教遺産も認めましょうということが、これがユネスコなのです。だから「思想が違うから、宗教が違うからこれはだめだよ」というような評価ではない。私の今日の話はもうこれですべてなのです。

これに登録された場合は義務が生じるのです。これも横文字で書いたほうが分かりやすいので書きましたけれども、まず *protect* する。守る、保護する。それから *conserve* する。よく「あの人は保守的だ」という時に、*conserve* と言いますね。今アメリカのブッシュさんの周辺にはネオ・コンサバティブの人たちが居るといいます。それから守るだけではなくて、それを保存していかなければいけない。それもその国の責任です。その国で、*his territory* その領域において保護し保存していくという、それが二番目のポイントです。

それからほかの国と協力せよと言っているのです。つまりこの条約の加盟国は日本なら日本の一二、まもなく一三を数える世界遺産を守るだけではなくて、外国の世界遺産と一緒に守り保護する義務を負っているということなんです。もう今さら分かっているという方が多いかと思いませんけれども、どうも新聞やテレビなどを見ると、ちつともそういう事を言わない。

特に教育的、あるいは情報的プログラムによってこれを他国と一緒にやる。だから今日の商大さんの企画はこれに沿っているのです。そして何のためにそれをやるかというと、世界遺産にたいする感謝、*appreciation*、これが存在する事への感謝とそれから *respect* 尊敬を深めるために他の国も含めてそれぞれの世界遺産をよく認識し、*protect* し *conserve* するために、教育的あるいは情報のプログラムを組めと言っているのです。

こういう責任を我々は背負った事になると思います。ある特定のところ、一二番目だとか一三番めだというだけではない。これは例えば皆さんも世界の各地においでになるとと思いますが、この間ベルリンの博物館展が神戸でありました。日本だったらちよんまげを結って幕末の政争をしている時に、ベルリンにはちゃんと博物館が出来ているのです。その掲示を見ましたら五千五百年前にメソポタミアにおいて世界文明が誕生したと書いてある。うれしかったです。何か中学時代を思い出しました。四大文明の一つ、そのメソポタミアというのは何だと思われませんか。初めてお聞きになりますか。メソというのは middle、真ん中、それから between と書いてありますから間、ポタミアというのはポタモスの複数形ですから川。これはギリシヤ語です。私はギリシヤ語を一年間だけ勉強したことがあります。最初五〇人ほど居たのに終った時は三人でした。

学生にメソポタミアというのは今のどこかという答えは出ないですね。イラクが世界文明の発祥の土地になっているのです。これで五千五百年前、今日お話しするような熊野もまだ脚光を浴びていない時代にどうだったかという事を考えると、いま戦争のど真ん中に巻き込まれているでしょう。これは我々を含めてユネスコにとつては許しがたい事です。そう思われませんか。

シルクロード展が神戸で、世界遺産を含めて開かれるようではありますが、バーミヤンの石仏の顔を削るというような事はこれは絶対にしないように、その関係の地域の人々にちゃんと説明して、思想の違いで遺産を破壊することはやめてほしいと思います。

ですから我々は日本国内の世界遺産に責任を持つと同時に、ほかの国の世界遺産についてもよく認識を深めて保護し、それを保存していく義務、duty があると書いてあります。これを負っているということでもあります。

それで今回登録されましたのは後ほどお話があると思いますが、大雑把に言うと、吉野大峰、何か近い感じですね。山伏姿で修行する大峰奥駆道というのがあります。それから熊野三山、今日はその近くから山本先生においでいただいております。それから熊野参詣道、これには中辺路、小辺路、大辺路があり、それから私の縄張りである伊勢路というふうになるのです。それから高野山。さらにバッファ・ゾーンという緩衝地帯です。その周りに保存すべき空間を置いておりますので、それを含めて一万一八六五ヘクタール。日本で文化遺産の中で最大の面積を抱える所。よくこれが認められたと思います。

この世界遺産というのは、私は古いから良いものだと思いません。それだったら広島原爆ドームがどうして世界遺産になっているのですか。広島原爆ドームが登録されているということは、ユネスコの精神、国連の精神において、これは人類の共通の遺産として残さなければ、再び核戦争が起きるかもしれないという現状から核の恐るべき被害を人類史上に記録するという事です。

これはアメリカでどう思いますかと聞いたら、「何だ、チェコの建築家による普通の建物か」と言われるかもしれません。アメリカは原爆を投下した意味をよく理解していないようでありますから。しかし人類最悪の事態を生み出した。私は戦争というのは最悪の人権侵害だと思えます。人権侵害の最たるものは命を取るといふ事です。いろいろな人権がありますけれども、命を取られたら元も子もないのです。ところがいろいろな名目を付けて戦争をする。

そのために世界的に考えた場合、広島原爆ドームは残さなければならぬという事です。だから、今回一二番目に登録されたことを考える際にも、今言った問題と、世界遺産という点の共通の理解を持たない限り、古いもの、良いものがあるからというだけでは歴史は理解できないと思うのです。

時間がありませんので、後ほど詳しくご専門の先生からお伺いするとして、なぜこれが世界遺産になっているか。世界遺産の場所を提供したか。物が生まれるためには場所がなかったらだめでしょう。その場所を考えるために、私は紀伊半島論というのを持っているのです。紀伊半島というのはこの紀伊山地で、ほとんど山でありますから、紀伊半島の大半が紀伊山地なのです。

それはどういう範囲かというと、まず和歌山県のほうからいうと紀ノ川、奈良県に入って吉野川、それから山を越えて川が反対に伊勢湾方向に流れますけれども橿田川、この一線を結ぶ線を私は歴史上、それぞれの時代、古代であろうが中世であろうが、かなり一つのものとして理解するべきであると考えています。国でいうと紀州の国、大和の国、伊勢の国、ちよつと志摩も入るかも分かりません。

こういう国々があるけれども、国というのは人為的、行政的なものでありまして、県も人為的なものです。けれどもそれを越えて人々が暮らした時代は、その事を念頭に置いて考えなければいけない。そう考えると、紀伊半島論がいろいろな歴史の大事な局面において重要な文化を育てているというふうに見えるのです。地図で見ますと本州最南端なのです。本土ではありませんけれども本州の最南端でしょう。黒潮が流れています。しかも日本列島最大の半島なのです。

こういう自然的条件を踏まえた上で、今回登録された歴史遺産が生まれているのです。物があるだけではないのです。よく文化財としての物があるからいいというふうに言いますけれども、私は物の前に自然をちゃんと置いて、自然のもとで人間がどのように生き継いできたか。自然が特に人間の手で破壊されると、いま問題になっている環境だとか景観の問題が出てくるのです。だから歴史遺跡を生み出した自然というのは非常に大事なものであると思うのです。細かいところは置いておきますが、この登録された時に哲学者の梅原猛さんがこう言われました。

「山、海、川、滝、森、そして神と仏がいる」と。

私はこのごろテレビを見ると、本当にアメリカのブッシュさんがどうしているのか知りませんが、ニューオーリンズのハリケーンの被害を見たら、やはりテレビに向かつて私は安全を祈って拝みますよ。ちょっと歳よってきたのかな。何とかして「ポケットにいくら入っているかな」と思いたいくらいです。どの国のことでも。

大正一二年（一九二三）に日本が関東大震災に遭った時に、アメリカから救援のお金が来ました。国内では、日本の移民に対してアメリカは猛烈に反対しているのです。だからそういう点では排除しているけれども、災害に遭った人のためにはアメリカから莫大な金が寄せられているのです。だから災害対策というのは政治とか思想を超えているのです。これに対する救援は、これは人間としてのやるべき事です。

こう考えてみますと、今日検討されます分野は、山があり海があり川があり滝があり森があり、そして神と仏がいる。先ほど冒頭に申しましたように、一神教世界、つまりキリスト教世界とかユダヤ教やイスラム教世界では神はいっぱいいいではないでしょう。日本には八百万（やおよろず）の神もいるし、仏さんもいっぱいいるのです。それをガツと抱きかかえている国。山だって一種類の木がどんどん育つのではなくて多様な樹木があり、自然の中で育つものがあるという中で考える。一律に同じものではない。

世の中は一つしかない、神も一つしかないと思っている人々が遺産という事を考え、しかし世界でテーブルを一緒にした時に多神教の世界の文化も認めましょうといっているのです。やはりユネスコというのは大したものだと思います。

それから新宮という、ちよūdō三重県と和歌山県の境、今日は山本先生は新宮からおいでいただいているのですが、そこに佐藤春夫という文学者がおられた。「さんま、さんま、そが上に青き蜜柑の酸すをしたらせてさんまを食ふはその男がふる里のならひなり」という『秋刀魚の歌』（大正一〇年）というのがあります。この間行つてサンマを食べました。サンマ寿司です。その佐藤春夫が「空青し、山青し、海青し」と自分のふるさとを表現しているのです。

時間の関係がありますので、要点だけ申しますと、千年を超える歴史の中で古代なら古代、中世なら中世、それこそ源平の争いだったつてこの地域にある。それから京都からやつてくる「蟻の熊野詣」、上皇が来るときりもなく多くの人たちがやつて来る。

江戸時代に入りますと今度は、西国巡礼一番の札所、青岸渡寺というのがあります。それからお伊勢さんがあります。東から来たら回つてきます。西国三十三カ所巡り、なぜ西国が付いているのかというと、東から来るから西国と呼んでいるだけのことであります。元は西国が要らないのです。日本の中心が限られておれば西国も東国も問題ないのですけれども、ずっと日本が広がった中で東から来るから、西国へ行きますという言葉になってくるのです。

本当に熊野の信仰というのはすごいです。それから伊勢神宮、お伊勢さんがあります。それから西国札所があります。これは一生懸命お参りしているようで、ついでにいろいろ遊んで行きますので、京都・大坂で芝居を見たり新しい文物に触れて、そして持って帰った旅の記録を残して、それをいろいろな人に情報で伝えるということです。

我々は旅行すると必ずお土産を買います。東北辺りの例では、結婚式の会場を出る花嫁花婿に親類縁者が饞別を一人ずつ渡します。これはお土産を買うという意味もあります。これは江戸時代以来の習慣です。皆さんの親類の方、修学旅行に行く時に何か持ってたかかわいい孫や甥、姪にお渡しになる。あれは江戸時代の習慣なのですけれども、そういう中でお土産を買ったりしていろいろな情報を伝える。

このほか、様々な形で古代以来のこの信仰をずっと引き継いできた。鉄道の普及と共にこれが変わるので、今回の登録によって再生されることになるのではないかと思います。今回登録された文化遺産は自然が生んだと私は思うのです。自然に人間が応えて育てた文化で、何も無いところから人間が作ったとは思わない。その場所が人間の思想、哲学と宗教と一致した結果で、だから人間がストレートにこんなのを作ったという考え方を私は採らないのです。

古いから良いという考え方も採りません。さきに述べたように、広島のをご覧になったらお分かりのように、人類にとって大事な物ということです。それで自然は動かない、文化財も動かないとすると、ここに暮らしとの関係で開発が進んでくる。紀伊山地は幸いにそういう場所ではないのでよく残っている。登録のためにずいぶん頑張られてきましたけれども、屋久島、白神山地は観光客が増えていろいろな問題が生じ始めている。

屋久島へ見に行くのはいいです。私一人だったら屋久島の縄文杉の柵の中に入ったって構わないと思いますけれども、これが万人に踏まれたら杉はかなわないですよ。だからそういう点で、物を見に行くときにはちゃんと考えて行かないといけない。いい物があるから見に行こうというような魂胆ではなくて、それを育ててきたことを「よく見聞きし、そして忘れず」(宮沢賢治)に考えていかなければいけない。

世界遺産は保護し守り抜く義務があるので、奈良県では残念な事に平城宮跡付近の下に地下道を掘るといふ話がありまして、これは本当にどう思われますか。世界遺産条約をいっぺん県で点検して欲しいと思うのです。三県の一つに奈良県も入っているのですから。

多くの動かない歴史遺産の中で動くものは人間です。巡礼道というのは人が動くものなのですが、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラという巡礼道があります。ヨーロッパで列車に乗っていて、「どこへ行くんだ」と聞くと、「これから巡礼に行くんだ」という人が時々います。我々は遊びに行くと言いますが、本当に巡礼に行くのです。途中まで列車で行って歩く所は歩くのでしょうか。

そういう人たちを見ていると、このサンティアゴの場合は、今も本当に信仰のためにに行っているのです。これが日本の場合、信仰がどうなっているのかなという事をつくづく感じるわけです。もう、ひと言だけ申しますと、世界遺産は今回の場合は県を越えて三県合同の登録になった。それから道も指定された。これは注目すべき事だと思います。

しかも時に国境を越えなければいけない。日本は島国ですから国境を越える事は難しいのですが、同じ時に登録された高句麗の壁画は中国と北朝鮮にまたがっています。中国も北朝鮮もない時代に作られた高句麗の遺産ですから。だから我々の考えは国を越えなければいけない。いわんや県を越えなければいけない。そういうふうに私は考えるわけです。

日本ではこの地域を支えている多様な宗教、つまり仏教、日本の自然から生み出されてきた神道、それからそういうものと融合した修験というものがあります。この間私は作曲家の三枝さんの話を聞く機会があったのですけれども、三枝成章さんから千五百年前のキリスト教の歌をCDで聴かされました。つぎに隠れキリシタンが日本で歌っている歌を聴かされました。同じはずの歌が全然違うのです。

ヨーロッパのほうはローマ帝国の下で作られたものが、ローマが滅んでもキリスト教が音楽その他を楽譜に書いて伝えるというのです。楽譜は五線があつて、指が五本あるから五線になつていようです。私は賢くなつて帰り、教養がこぼれそうになりました。その時に、日本の音楽、邦楽には楽譜がない。だから先生によつて歌い方が違うという。違つてもいいのです。

ところが、ヨーロッパではちゃんとした譜面があるから、千五百年前の音楽を今も正確に演奏する。しかも歌にメッセージがある。日本の演歌みたいな哀れなものではないのです。思想がある。だから今度EU（欧州連合）がアメリカのドルに対抗して、一つの通貨制度を作り出しました。この中でEUの国歌は何だと思われませんか。ベートーベンの「歓喜の歌」です。国境を越えた音楽を加盟国が持っているのです。

世界遺産というのも、私はそういうものだと思います。日本の思想はそういうものと比べると、例えば仏教というものが日本に入って来た場合になつたかです。中国の仏教、インドの仏教と日本の仏教は同じかという、かなり違うのではないかと思うのです。

例えば、脱線してはいけません、司馬遼太郎記念館が東大阪のこの商大から歩いて一五分ぐらいの所にございますが、司馬さんがおもしろい事を言う（『アメリカ素描』）。日本の梅干のウメをアメリカのニューヨークの辺で植えたら一年目は日本風のウメが生るのです。二年目になつたら黒いプラムになつてくるのです。ウメというのは日本のウメだからウメなのです。それをよそに持つて行くとかわる。そのことから文明を論じておられる。

サクラだつてそうです。日本のサクラは春に咲いて早々に散りますけれども、ワシントンに生えているサクラはもっと長く咲くのではないで

すか。六月ごろになってもサクラが咲いています。こういうふうになると、思想というものが入って来ても、その風土の中で育てていく。だから中国の影響が入った、どここの影響が入ったというだけではなくて、その土地の自然と長年の歴史の中でそれぞれの文化を育てる。それが文明なのです。

だから、仏教は外来のものであるといっても、これは日本の思想の風土の中で育ってくる宗教、仏教であろうと思うのです。そういう点では世界の人から見たら、一神教の世界ではありませんけれども、人類文明を考える上で大事な問題だろうと思います。幸いに今回の登録をめぐるまして、私の知っている範囲でも一年前の登録内容を学習するためにいろいろな研究会が生まれておりまして、三重熊野学研究会とか熊野歴史研究会が動き始めています。東京の大学も熊野の研究の組織を作り始めていますので、皆さんもいろいろな機会に触れてその認識を深めていただいたいと思います。ちよつと時間が超えたかも分かりませんがご了承お願いいたします。(拍手)

總合司会 酒井先生どうもありがとうございます。それではただ今より十分ほど休憩させていただきましたので、よろしくお願いたします。では二時半から始めさせていただきます。

總合司会 それではビデオ上映の代わりに絵図の解説を山本殖生先生にお願いしたいと思います。山本先生よろしくお願いたします。

山本 皆さんこんにちは。何か急にこういう事になってしまいました、ビデオを忘れた人がおりまして急遽私のほうに回ってまいりました。これは、熊野那智参詣曼荼羅^{まんぢら}という、熊野のパンフレットなどでもよく紹介されている絵図なのです。実はこれは熊野比丘尼が絵解きをしたという事で、本当でしたら私が熊野比丘尼に化けて皆さんに絵解きをすところなのですけれども、今日はその衣装も持っていないで、実は昨日愛知万博でやってきたところなのです。

その帰りにここに寄ったものですから、衣装はふるさとのほうへ帰っているのです。まさかこんな事になると思いませんでしたので、今日は絵解き口調にはなりませんけれども、化けないとちよつとやりにくいものですから、解説という感じで二〇分間ほど説明をさせていただきます。

那智参詣曼荼羅は大勢の人がお参りしている様子を描いているものなのですけれども、戦国時代ぐらいからこういう絵図が出来てきたと言われております。熊野比丘尼は女性ですから、特に女性などを対象にして絵解きをしたと言われております。何のためにやったかという、熊野のお宮、お寺を建て替える資金を集めるためにやっている訳なのです。世の中、戦国時代ですからお参りの人も少なくなってくる。莊園経済



熊野那智参詣曼荼羅図（三重県 大門寺本）

も崩れていく。そういう中で熊野比丘尼たちがこう
いった絵図を折りたんで、全国各地に持ち歩いて
絵解きをして皆さんから浄財を集めた。今日は浄財
を集めませんから安心して下さい。

折りたたんだ跡が少し見えるかもしれませんが。こ
れはなぜ曼荼羅とかというかと、曼荼羅とは理想
の世界がそこにあるという意味です。先ほどの酒井
先生のお話ではごさいませんが、本当に熊野
の奥深い山があつて、日本一の那智の滝が落ちてい
て、川となって海に注いでいる。そこにお宮、お寺
がたくさん建ち並んでいて大勢の人たちがお参りを
している。そういう那智の聖地の理想世界といいま
すか、そういったものをここに描き込んでいる。そ
れを説明しながら布教して、皆さんからお金を頂い
たということなのです。

まず下のほうから見て行きたいと思えますけれど
も、大きな鳥居がありまして「日本第一」と書いて
いるのです。そしてこの後ろにあるお寺が補陀洛山
寺といまして、補陀洛渡海の上人たちが集まるお
寺だったということです。お寺の場合はこういうふ
うに瓦葺なので、こういう描き方をしています。

こちらのほうが熊野九十九王子の一つ、浜の宮王子

なのです。熊野三所の建物があります。これは松皮葺ひたぶきですからこういう感じで描かれております。お寺とお宮は少し違うのだということなのです。

そして鳥居がある。ここに関所が二カ所ほどあります。川関、井関という、現在も地名が残っていますけれども、そういうことなのだろうと思います。そしてここに例の補陀落渡海の舟が浮かんでいるということです。これは「南無阿弥陀仏」と書いた帆掛け舟なのです。小さな舟ですね。五、六メートルぐらいだと思います。扉一つない屋形船でして、周りに鳥居がありまして、本当に棺おけ舟という感じなのです。

ここに閉じ込められて、南の海のかなたにあるという観音の理想の世界、補陀落浄土を目指して船出して行つたのです。積極的な自殺行為なんでしょう。肉体は滅んでも魂は観音の世界で生きられるのだという、そういう崇高な気持ちで出掛けて行つたわけです。なかなかこれは、皆さん、全国から募集してもだれ一人いませんでした。こんな事をやってみようという人はいません。

日本一的那智の滝で修行をした上で出掛けて行くという、そういう崇高な気持ちがないとなかなかできません。そしてこの渡海をしようとしているこの主人公はだれなのかということなのですけれども、実はこの鳥居の下にいる三人の赤い帽子をかぶった人なのです。これは平維盛一行なのです。平家物語に出てきます。真ん中が平清盛、こちらの小さいのが石童丸です。左側が兵衛入道重景です。三人が今まさに渡海をしようとしている。

この赤い帽子というのは「鳥帽子」といまして、那智の滝で千日間の修行をした、そういう人がかぶる帽子なのです。補陀落渡海するのが近所のおじさんだったらひとつもおもしろくないですから。やはり平維盛が主人公ということなのです。そして補陀落渡海の舟の行き先には島が四つほど描いています。これは松の木が生えているのは山成島です。平維盛が入水したといわれている所です。

この島が補陀落渡海舟の帆を上げたという、その場所の帆立島という島。それからこれが嫌がる金光坊という人がここで殺されたという金光坊島です。これが補陀落渡海舟の帆を上げたという、その場所の帆立島という島。いまだに那智湾にこの島が四つ浮かんでいます。またいっぺん見に来て下さい。補陀落渡海してくれとは言いませんので。

そして那智山のほうへ上がっていくわけですが、那智山へ上がって行くのは那智川を渡っていくわけです。二つの橋が掛かっております。これがまず二ノ瀬橋という橋でして、先達に導かれて白装束のこの夫婦の二人連れが、いま那智山を目指しているところなのです。白装束、これが熊野詣のスタイルなのです。夫婦仲良くというイメージがあると思います。

そしてここにあるのが九十九王子の一つ、市野々王子です。二ノ瀬橋の下では西国巡礼の人が今禊みそぎをしているところです。そしてここに不

思議な、何か高貴な女性がサクラを見えています。これはだれなのかということ。これは和泉式部なのです。和泉式部が熊野詣したというのはうそです。ただ、なぜこんな事を描いているのかというと、和泉式部は八〇歳まで月の障りがあった。千人の男性と交わったという伝承があります。そういう恋多き、汚れ多き女性でも熊野詣ができるのですよと、そのためにここで描いているという事なのです。

そして那智川の河口には俵舟が浮かんでいます。これはなぜかというと、熊野比丘尼というのは全国各地を歩いて、お米やお金を集めるのが仕事ですから、我々の仲間が米をここへ集めてきたのですよということでしょう。そしてもう一つの橋を渡って行きます。これは振ヶ瀬橋といまして、ここから中が聖域なのです。ここから下は俗界です。聖域と俗界を振り分けている橋ということで、振ヶ瀬橋というふうに呼んでいます。

ですから、ここから中では肉食できませんから、これ、ちょっと見にくいのですけれども、ここで西国巡礼の二人が肉食をしている場面が描かれております。昨日、名古屋で絵解きした時は、これは名古屋から来た巡礼で「エビフライ（エビフライ）」を食べているのだという説明をしておきました。

そして、この橋の下で竜が現れているのです。これも不思議な場面なのです。これは那智の滝の神様の化身が竜となつて現れているわけです。竜神信仰です。那智の滝には竜神が住んでいる。要するに雨とか水を支配する神様ということで、ここに描いているわけです。勢い良くここで現れているということで、高貴な坊さんと対面をしているわけです。ですから、今年はドラゴンズが勢いがいいです。僕は阪神ファンなのですけれども、昨日「ドラゴンズは勢いがいいですね」と話をしておきました。

この坂道が那智山の大門坂です。観光パンフレットなどによく出てくる所です。ここにあるのが九十九王子最後の王子社の多富気王子とみけです。そして大門坂を上がって行きますと、ここにも関所があります。これは十一文関という関所です。そして大きな仁王さんのいる大門が描かれていますので、この坂を大門坂というふうに呼ぶわけです。

そして道はここからまっすぐ那智の大社のほうへ登って行く道と、横々に那智の滝のほうへ行く道とに分かれています。横々に行く道は巡礼道というふうに呼んでいます。そしてこの途中、ここに奥の院というお寺があります。これは法灯国師が開いたというお寺で、那智一山の葬式寺なのです。ですからお墓が描かれています。神主さんもここに葬られたということ。そして那智の滝のほうへ行くのですけれども、途中、ここに金の鉄塔に拜んでいるお坊さんがいます。これは金経門鉄塔といまして、昔から高貴な人たちがたくさんここにお経を納めた所なのです。金経門経塚という経塚のあとなのです。そして那智の滝のほうへ行きます。那智の

滝のふもとにはたくさんの建物があります。これが日本一的那智の滝、三筋になって落ちているので「三筋の滝」とも呼ばれます。

ここに火災が現れていますけれども、不動明王の火炎なのでしょう。そしてこれが花山法皇が三年間こもったという円城寺の跡です。三年間もこんな所でよく辛抱したものです。僕でしたらお酒を飲みたいので絶対にだめです。たぶん今日のパネリストの小田先生なんかは絶対だめだと思います。二日も持たないだろうと思います。ここで三年間こもっていた。

その時に竜神が現れて、アワビをくれた。九つの穴の開いているアワビなのです。それを那智の滝つぼに納めた。そして笠ぐらいの大きさになっていったという話があります。ですから、那智の滝の水を飲むと延命長寿間違いなしということですから、今度来たらしっかり飲んで下さい。飲みすぎて腹痛を起こした人がおりました。

いろいろな人が修行をしております。これは那智の滝千日修行する人がみそぎをしているところです。行水しているわけではないのです。那智の滝のところに掛かっている橋がありまして、靈光橋（別所橋）といいます。これは那智の滝の千日修行をしている人たちです。ここにまた修行をしている人がおります。文覚上人なのです。人妻に横恋慕して間違って殺してしまったという、とんでもない野郎なのですけれども、その人が出家して各地で修行を行いました。

那智の滝でも三年間の修行をしたということで、平家物語に出てきます。しかし寒さで凍え死にそうになった。その時に^{こんがら}鈴菟羅・^{せいたか}制多迦童子、不動明王のお使いです、それが現れていま文覚さんを助けているところなのです。なにか介護老人みたいに描かれていますけれども、そういう場面です。

それとこれが那智の滝の拝殿です。これが千手堂という那智の滝の本地仏をまつるお寺ですから瓦葺です。これが拝殿ですけれども、もしろい事に拝殿をぶち抜いている杉の木が描かれています。那智の滝の水の生命力が天に向かって伸びているということで、那智の滝の生命力です。そういう事を表しているのでしょう。

そしてこれが中門でして、那智の滝から滝道というのを上がって行くと、この中門を通ってここへ行くことができます。ここが田楽場という広場になっていまして、現在の西国三十三観音霊場第一番札所的那智山青岸渡寺、これがそうです。その横に広場がありますね。よくテレビなどで出てくると思います。皆さんがよく記念撮影をされている所です。あそこが広場になっています。

なにか木を引っ張って変な事をやっているのです。これは遊んでいるわけではなくて、お木曳^{まきひき}神事なのです。大工さんたちの仕事始めの様子を表しているのです。なぜかという熊野比丘尼たちは全国各地からお金を集めて、そしてお宮、お寺を建て替える。そのためにこういう神

事をここに描き込んでいるのだということなのです。

これが三重塔なのです。そしてこれが白いネズミを描いています、大黒杉。ここにある石が「ふり石」と言いまして、天から降って来た石らしいのです。おそらく那智の滝の遙拝所のような所でしょう。ネズミは北の方向を指しますから。那智の滝というのは本当に真北なのです。那智の滝を夜に撮ると北極星を中心にして星がぐるっと回った、そんな写真を撮る事ができます。一度また試して下さい。真北になっている。

そしてこれが那智の本社です。ここに中心になる建物が五棟建っています。これがちよつと引つ込んでいますけれども、これが滝宮なのです。那智の滝を地主神として那智山はまつています。ですからちよつと敬う気持ちを込めて少し奥まって建てているのです。現在でもそういう建て方になっています。

そして本宮、新宮、那智の神様をまつています。熊野三山はそれぞれがお互いに神様、十二所権現というのをお互いにまつり合いをしているのです。本宮、新宮、那智でもお互いに十二の神様をこういうふうにまつているのです。右から本宮、新宮、那智の神様。那智ではここが中心の神様、夫須美大神様ふすみのおおかみです。これが若宮さん、若一王子。このようにここに五棟の建物が中心的に建てられている人です。

そして那智山は土地が狭いですから、その他の神々、八社殿といいますが、これは曲がってかぎ型に建てられています。長屋住まいなのです。ね、かわいそうに。その他の神様ということですから八柱の神様と五つ柱の神様、那智の場合は十二所権現プラス一ですから、熊野那智十三所権現というわけです。

そしてここに透き堀があつて、高貴な人がお参りをしている様子があります。これはだれかという問題なのです。これも近所のおじさんだつたらおもしろくないのです。花山法皇なのです。花山法皇は西国巡礼を始めたという伝承がありますから、花山法皇をここへ描いているのだという事です。

そしてここにはカラスが二羽とまっています。熊野の神様の使い、ヤタガラスです。僕の胸を皆さんご覧下さい。日本サッカー協会のマークを付けているのです。日本サッカー協会のマークも二本足のヤタガラスなのです。二本足だつたら絶対にサッカーは有利ですよ。僕でもＪリーグに入ろうかなと思えそうです。うまく考えたものです。ここに熊野の神様のお使いのカラスを描いている。

でも二本足なのですけれども、この場合はどういう訳か二本足なのです。なぜ二本足なのか。意味が分からないのですけれども、「雌ではないかな」といううわさもありますけれども、それはやめときましよう、今日は。ここには烏石があるのです。神武東征のヤタガラス、要するに神武天皇を大和へ道案内したヤタガラス、そのヤタガラスがここでこつ然と消えたという烏石くわいしなのです。いまだにこの石が残っているのだ

す。カラスが羽をたたんで寝ているような形の岩がここでもまだに残っています。

そしてこれが那智の拝殿です。お坊さんがお経を呼んでいるのです。神仏習合なのがよく分かります。ですからこういうのを社僧といえます。神社のお坊さんということですよ。

そして、これが西国第一番札所、如意輪堂、今の青岸渡寺です。秘仏になっています。ですから当時から見るとは出来なかったのぞき込んでいます。平安時代から大変靈驗あらたかな仏さんだ、如意輪観音さんだという伝承になっています。平安時代から既に第一番の札所になっているのです。そういうありがたい仏さんがまつられているという事です。

そしてこういうふうには白装束の夫婦がずっと那智山をめぐってはいよいよ妙法山へ登っていきます。妙法山は死んだ人の魂が登る山、骨納めの山というふうには呼ばれていました。女人高野とも言います。先達に導かれて白装束の夫婦がずっと登って行って、最後に先達だけが残って白装束の夫婦がこつ然とここで消えているのです。亡者の熊野詣だった。亡くなった人の熊野詣だというふうには解釈されていました。この曼荼羅というのは本当に山のかなたの山中の他界、そして海のかなたの他界、そういうおどろおどろしい仏の入り口としての熊野を表現している。

しかし、それだけではなしに、那智の滝の水の生命力が育む、いわゆるいきいきとした豊かな聖なる世界も表現している。この絵は本当に死の熊野と聖なる熊野が溶け合った本当におもしろい絵なのです。熊野らしい絵なのです。曼荼羅でもないのです。そんな素晴らしい熊野の神様、仏さんにぜひとも今日は皆さん、縁を結んでいただきたい。そのためには熊野の神様仏様に心分の浄財を寄進することなのです。「さい銭はけちるな！」ということばで曼荼羅の絵解きは終わりです。ありがとうございます。(拍手)

はい。ちょっと時間がなかったので飛ばしてしまいましたけれども、これは太陽とお月さんです。日月という雲に乗った太陽とお月さんという事で、これは普通の写生画とは違うのです。宗教画です。宇宙観といえますか世界観というか、そういうったものを象徴的に示すために、ここに太陽とお月さんを示しているのだ、表しているのだということなのです。それでいいですね。小田先生。

総合同会 山本先生、分かりやすい説明をどうもありがとうございました。(拍手)

—— パネルディスカッション ——

それでは続きまして、パネルディスカッションに移らせていただきます。先生方どうぞ壇上のほうにお願いいたします。

では、パネリストの先生方のご紹介をさせていただきます。皆様から向かって右側より、本学教授・大学院研究科長・成田孝三先生です。新宮市教育委員会学芸員・山本殖生先生です。和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課世界遺産班・小田誠太郎先生です。そして司会は

三重大学名誉教授の酒井一先生にお願いいたします。先生方よろしくお願いいたします。

酒井 それでは絵解きで熊野にお参りいただいた後、本格的なシンポジウムということで三人の先生にお願いしたいと思います。時間の関係でお一人一五分ぐらいずつという、まことに恐縮なのですが。本当はいっぱい材料をお持ちになって、お話を伺いたい事があるのですが、一五分ずつを目処にお願いいたしましたして、その後会場の皆さんからご質問などをお受けしたいと思います。

それでは、最初に和歌山県からおいでいただいた小田先生にお願いしたいと思います。小田先生は先ほどちょっと申し上げましたように、この三県の協議会で立案いたしました日本で一二番目の世界遺産登録の推進力になった方でございまして、学術的にもいろいろな大きな業績を上げておられます。それではよろしくお願いいたします。

小田 どうも皆さん、お暑い中ご苦勞様でございます。和歌山県の教育委員会の中に文化遺産課という、文化財保存を中心とする課がございます。その中に今年の四月から世界遺産班というのがありまして、そこにおります。

この「紀伊山地の霊場と参詣道」というのは、二〇〇〇年の四月に公式に登録推進作業が始まりました。どこが最初に言い出したのかといいますと、和歌山県に高野山という所があります。「京都の文化遺産」で天台宗の本山の比叡山が登録されております。その「古都京都の文化遺産」の中に真言宗の有力寺院も多数入っております。「うちの本山は何をしているのだ」というような話になりました。それでこの高野山も単独で、実はユネスコなんかに働きかけをされながら世界遺産登録を目指されていたようなのですが、実はこの世界遺産というのは、先ほど酒井先生のお話にもありましたけれども、国が国際条約に基づいて自国で保護している文化遺産を、国際的に価値のあるものだという事で登録して下さいということで世界へ持って行く、そういうものであります。あくまで主体は国が持っているものであります。

いくら地元が盛り上がったところで、なかなかなりにくい。インターネットをされる方は世界遺産というところを開かれますと、各種のホームページがありますけれども、全国で五〇カ所以上は世界遺産に登録しようということで、名乗りを上げている所があるようです。

ところが、国が主導権を持っているということで、文化庁という役所があるのですけれども、その中におそらくは、日本の国内の中で何か所か世界遺産に登録できるような国際的な水準に達している所というものに関するブラックリスト、ブラックリストと言ったら何か悪いような意味なのですから、良い意味でのブラックリストみたいなものがたぶんあると思うのです。

それと申しますのも、世界遺産というのは例えば国内で「文化財保護法」という法律がございまして、僕は国宝でも何でもないのですけれども、僕がもし国宝だとすると、それを守るための保護規制を掛ける範囲というのは僕の体にしか及ばないのです。ところが世界遺産というの

は、それだけ大事な物だったら、実はこの部屋ごと、その物が存在する環境ごと、保護を掛けなくてはいけないということになります。

ですから、世界遺産に登録することによって、実は国内にある色々な文化財についても国内法以上の保護措置が取っていかねるといふことなので、これは明らかに文化庁も公言していますけれども、非常に大事な物で、なかなか生活もありますので国内法だけでは十分カバーしきれないような所を、優先して守って世界遺産に登録して・・・。ベクトルで言いますと世界遺産は世界に向けて発信するのですが、実は国内に向けてもベクトルを向けて保護をちゃんとやっていこうという、そういうためにも世界遺産というのは効果がある、という事を申ししています。

「紀伊山地の霊場と参詣道」というのは、テレビでたくさん流れておりましたので、だいたいどんな所があるかというのをご存知かも知れませんが、おさらいの意味でちょっと申し上げておきます。大阪から一番近いのが近鉄の吉野線というのに乗って参りますと吉野山、サクラの名所、吉野山というのがあります。修験道の霊場ということですが。

それから南海高野線という電車に乗って行きますと、高野山という所があります、そこは空海、弘法大師という人が平安時代の初めに中国から真言密教をもたらされて、真言宗の本山としてお開きになった高野山金剛峯寺がある場所です。

それからずっと南の熊野、紀伊半島というのは当時の世界観から言いますと“The end of the world”でありまして、酒井先生は英語が好きですので僕もちょっと英語で対抗しようと思えますと、“The end of the world”ということでもあります。発音がもう一つですが。

この「世界の端っこ」ということは、実は「他界への入り口」ということです。他界というのは何かというと、人間以上の者が支配する所で、す。そういう存在、神とか仏とかいるいるな言い方はありますけれども、そういう者が支配する世界に最も近い所である。この紀伊山地の信仰の基盤というのは実はそこら辺りにある訳であります。神話の世界からこの紀伊山地がそういう特殊な目でもって、特に奈良・大阪・京都、都が所在した地域の人たちから見られていたという事、それがそもそも「紀伊山地の霊場と参詣道」というようなものが形成される根本的な要因になったというふうに考えられる訳なのです。

その三つの霊場へ、平安時代の中ごろから終わりにかけて、都の人たちがまずはたくさんお参りに行くようになります。定期的になくさんの従者、キャラバン隊みたいなものですが、中心となる人々は、今の内閣の半分ぐらいを連れて約一カ月都を空けるわけでありまして。おまけに特に熊野などは女性の方の参詣をも拒まない。あるいは重い病氣、あるいは社会的に非常に差別されやすいような待遇の人たちをも受け入れるということで、数多くの方が行くようになりました。

それで、それらの霊場を結ぶ参詣道というものが出来た訳なのです。ですから「紀伊山地の霊場と参詣道」というのを簡単に言いますと、非

常に特異な地域として、古くから、神話の時代から日本人の頭の中に位置付けられていた聖域であります。紀伊山地を舞台として必然的に生まれ、た三つの、三種類の、修験道、神道、仏教、神仏習合、その霊場とそれらを結ぶ参詣道、ですからその端っこは全部京都、大阪、奈良につながっているということがあります。

時々、紀伊山地というのは「近畿のおまけ」などと言われまして、非常にへき地なので昔の原始的な文化が残っているのだという言い方をされる場合がありますけれども、それは大いなる誤解であります。実は紀伊山地を育んだのは京都、大阪、奈良、都があった地域の人たち、日本の中央の文化が育んだ。それと同時に、都の人たちが心の中に抱いたいろいろな願いをかなえてくれる場所として、日本の文化、精神文化をも支えてきた。そういう場所だということなのであります。

世界遺産は日本の中では文化遺産が一〇件ありまして、全部で二三件。この間、「知床」がなりましたので、今全部で一三件のうち三つが自然遺産ですので、残りの一〇件が文化遺産なのです。だいたいその世界遺産というものも登録される年代におきまして一つの傾向があるわけなのです。それが必ずしもユネスコの当初の主旨ののっとったものではないという現象が実は表れまして、最近徐々に世界遺産の登録基準というのが厳しく、かつ変化してきております。

この「紀伊山地の霊場と参詣道」というのは、実は最先端に行く世界遺産、ユネスコの精神に基づいて最も望ましく世界遺産というふうにも位置付けられているという事で、日本の国内の既に指定されている遺産とか、あるいは世界に存在する数多くの世界遺産と少し違う所なのであります。

その辺りを中心にもう少しお話を申し上げたいと思いますが、時間が半分過ぎてきました。僕のプリントをそこへ付けてありますので、言い残した事はこれを後で読んでいただければ結構なのです。ちよつと日本の世界遺産を思い浮かべていただきたいのですけれども、例えば兵庫県の姫路城でありますとか、あるいは奈良の法隆寺ですね。それから日光の文化遺産、東照宮とか二荒山神社、輪王寺とかいうのがみな入っています。それから合掌造りの白川郷というのがあります。

パーツと考えていただいただいたい思い浮かぶのが、皆さん特殊な建造物ですね。厳島神社というのもあります。ですから、そういうものを monument、発音が悪いですけども monument、単純に訳すと「記念工物」、日本の文化財では「建造物」というふうに言っていますけれども、そういうふうな物。それというのも人類が、非常に動物にない能力を使って人工的構築物を作るわけなのですけれども、そういうふうな物の中でも非常に優れた物ということで位置付けられている文化遺産です。

それから古都京都・古都奈良と、奈良と京都がなっていますけれども、それはいわゆる日本の国の都が所在した場所ということでありまして、その中には当然有名な神社仏閣、あるいは平城宮跡というような都の遺跡も入っております。それからそういうのは建造物群とも言えるのですが、ある意味では都の遺跡、*site*みたいな感じもある訳です。遺跡の事を英語で *site* というのです。

その最も端的なものが琉球、沖縄県にありまして、「琉球王国のグスクと関連遺産群」という名前になっています。それはどういうような物で構成されているかといいますと、琉球というのは独立国でありまして、東南アジア、中国、朝鮮半島、日本の文化のるつぼのような所であります。そういう所との文化交流、交易を中心にして成り立っていた国家なのであります。それが最終的には日本に合併されてということになるのです。

ですから、独特の文化を育んでいまして、その、グスクというのはお城のことをグスクというのです。日本のお城ですと、大阪城なんかはわりあい平面形が四角いプランになっていますが、外国の影響を受けてまして、一部曲線系を取り入れた非常にユニークな形のお城になっています。いま沖縄へ行かれますと復元された石垣がダーツと上までありまして、その上には建物まで建っている所がありますが、そんな物をご承知のこの間の戦争のおかげで、石垣の下から二列目ぐらいから上は全部、アメリカ軍と日本軍の両方の爆撃やら何やらで吹っ飛んでしまいました。ですから、復元されて史跡として整備されてはおりますが、資産価値自体はその地上わずか一メートル、そこから下にずっと広がっている遺跡ということです。ですから当然 *site* なのです。世界にも実はそういう建造物、キリスト教関係とか宗教関係の建造物ですね。それから神殿の跡だとか、何とか遺跡の石造のピラミッドなんか典型的な物です。どうして作られたか分からない建物なのですが、壮大なあれだけ大きな物を人類が作っているのだというような事で、皆さんは世界遺産というところでああいうふうな物をイメージされる場合が多いかと思えますけれども、そういう物が多いわけです。

それと同時に、ダーツと砂漠の中に、今はもう川の流れがどこかに移ってしまっただけでそんな面影は全然なくて見渡したら砂漠なのですけれども、その下には実はモヘンジョ・ダロとかメソポタミアなどの遺跡が残っております。そういう所に広大な遺跡が存在する。そんな物が結構多いわけなのであります。

ですから、そういう、ある意味で *site* であるにしろ、*monument* であるにしても、何かしら人工的な働きかけを誰かがやって、それで作り出したそういうふうな物という、人工構築物と言ったほうがいいのだらうと思うのです。そういうふうな物が実は文化遺産の大半を占めてきたというようになってきております。

ところがユネスコのこの世界遺産条約の目的というのが、ユネスコ憲章にあります人類の多様性を相互認識し合おうということで、そこが一番大事です。相互認識をちゃんとしなから独善主義に陥って、武力を使って世界大戦などになってしまおうという、そういう考え方です。一九四五年に国連憲章、ユネスコ憲章が出来た時はその反省が非常に強くありました。まだ煙も収まっていけない時期であります。そういう事でありまして、心の中に平和の砦を築くためには自分たちだけの価値観だけではなくて、世界にはいろいろな考え方、生き方、文明というものがある。それを理解し合わないことには、いつまでたっても争い事の種がなくならないという事で、現代の社会が象徴しているようなものであります。

ところがふたを開けてみると、特定の地域の人間が構築した遺跡ないしはモニュメント的な物ばかりになってまいりました。「これはちょっといかんぞ」という話になります。それで十年ぐらい前の世界遺産委員会から次第に状況が変わってきまして、出されたのがこの「文化的景観」という、はつきり申し上げますと、自然と人間とのかかわり合いを表す文化遺産、その中で重要な要素を占めているのは農林業、それから宗教です。

この紀伊山地の霊場というのは宗教に関連する文化的景観ということなのです。簡単に言えばそうなのですけれども、それだけでは収まりません。宗教に関連する文化的景観、言葉でしゃべりますと、「あ、そうですか」で済むのですが、どういう意味合いを持つ宗教に関する文化的景観なのか、という事が大事であります。あと一分ちよつとしかありませんが、それが今日の私のお話の中心なのであります。

実は、先ほどから申し上げておりますように、紀伊山地には人の心、仏教を信じようが神を信じようが、人の心を引き付けるような自然が存在した。心を引き付けるのは何かというと、DNAを引き付けると私は考えております。ですから今や周りが人工的な生活になって、なかなかそういう事を認識する事ができないのですが、ここで皆様方に「三分間息を止めてみる」と言えば、あるいは「一週間水を飲まずにおれ」と言えば、何をもって自分たちの命が支えられているのかというのはすぐに分かるはずなのです。往々にしてそういうものを忘れてしまっている。

現代社会においては世界全体がだいたいそういう傾向になってきつつありますが、特に日本の歴史をたどりますと、奈良、京都、あるいは難波の宮などで、人工的な環境の中で多くの人々がちよつと不自然な生活を強いられるような環境、そういうふうな所になりますと、やはり自分たちの中に潜むDNAの欲求というのがムラムラと起こってくるわけです。

そういうことで、その当首都の南という、これは太陽が登ってくる聖なる方角、神々への、神仏の世界への入り口に最も近い地域である紀伊山地という所、そこに自分たちの心を、DNAの飢えを満たしてくれる世界があるというふうに考えた。それが元の発祥だという事はさつきも

申し上げました。

そういうふうなものが生んだ霊場と参詣道。それが現代において何を意味するかというと、取りも直さずこの近代社会の中で、ともすれば人間として、あるいは生命として忘れてはならないものを忘れつつある、それを思い出させてくれる、そういう要素を持つ数少ない世界遺産なのです。だから人工的な環境の中にいる人間が、人工的に構築された素晴らしいものをいくら見たって、ある意味では「ああ、そうかいな」で終わるのです。

ところが、自分の中で麻痺している感覚、一番大事な基本的な感覚を思い起こすための材料、それこそまさに世界人類がそれによっていない人というのはだれもいない訳です。だからいろいろな価値観、いろいろな理屈は成り立つにせよ、皆が地球の自然とか宇宙の自然によって命が長らえているという、これはもう共通項なのであります。唯一の共通項なのです。

ところが世界遺産の中でも、そのことを感じさせてくれる資産というのは、実は以外に少ないということです。それが幸いにも紀伊山地というのは近畿のおまけでありますので、都市開発の波がなかなか及んでこない。世界遺産になっているところでも何度か建て替えられたりして、歴史は古いだけでも今の建物は江戸時代の物だけでも、重要文化財になっていて世界遺産になっているというような物もあるのです。

ところが、紀伊山地の場合というのは、最初に神、仏が鎮まるというふうに昔の人が信じたそのままの自然が、今もおかつ、自然というのはスパンが長いのですから。だから千年前といましても一呼吸みたいなものなのです。人間世界ですとその間に何代も何代もいろいろな争い事があった、なかなか物の形は保ちにくいのですけれども、紀伊山地というのは昔、紀伊山地の自然を目の当たりにして、そこに神や仏が鎮まるというふうに古代の人が思ったそのままの、あるいはそれに近い自然が残っております。

そういう資産が、実は世界遺産の中でも日本国内、これから登録されようとしているものも何件かある中で、非常にまれだということなのです。ですから、そういう意味でこの紀伊山地の霊場と参詣道は、そういう現代社会、世界の現代社会が持つ心の飢え、DNAがささやく心の飢えですね。人間らしさというか、生き物らしさを人間が取り戻すための、非常に重要な要素を占めた「心の世界遺産」というふうな事が言えます。

ですから、今日お話を聞いていただいて非常に有難いのですが、ぜひとも現地を小人数で訪れていただきまして、それからもう一言だけ、行く前には精進というものをしていただきたい。先ほど絵図の解説の中で、際まで魚を食べたり日したりなどという話がありましたけれども、実は昔行く人は精進屋というのにちよつともりまして、あらゆる汚れを遠ざけて体、心身ともに浄化して、神・仏に願ひ事を聞いても

らうために行ったという事です。

医学的にも何点かそういう効果も証明されているようでありますので、ぜひとも一週間ぐらいはちょっと辛抱されて、なるべく小人数、一月から二月ごろまでの方がいいと思うのです。ある程度すぐに帰ってこず、車などでピューっ之行って帰って来たら一つも自然の力を吸収する、自分でよみがえらせる力というのがありませんので、どうかお時間を少なくとも二日か三日は取っていただいて、そういう体験を、体験型世界遺産でありますので、よろしくお願いいたします。ちょっと超過いたしましたして恐縮でございます。

酒井 ありがとうございます。(拍手)

精進して熊野を歩いてもらうと何よりです。私は精進せずに歩いたもので、サンマにあたりましてじんましんが出て困った事があるのですが、自然と祈りとかかわりをお話になったと思います。小田さんのお話の奥にはもっといういろいろなお伺いしたい事があるかと思しますので、時間がありましたら後ほど補足していただくといいたします。

次に先ほど急遽絵解きの実演していただきました山本殖生先生に引き続きお願いします。本来なら服装を整えて絵解きをしていただいたら、もうちょっと皆さんも深く理解されたかと思えます。今日は急をお願いいたしました事に申し訳ないのですが、幸いに飛び入りの形ながらライブでやっていただきました。よろしくお願いいたします。

山本 先ほどの絵解きは失礼いたしました。絵解きというのは何と言いますか、臨機応変にやるというのが一番大事なようでございますので、まさに臨機応変でございました。今お話にございましたように熊野へのお誘いということで、皆さんぜひとも熊野へ来ていただきたいなということ。実は今回世界遺産になりました参詣道の中でも、熊野川が初めて登録されました。世界で初めてということだそうでございます。

そんな事でここを昔ながらに舟で下っていたかどうかという事で、九月二五日からそういう事業を始めることになっております。ちょうどそのお誘いの話になっていいかなと考えています、そのPRも兼ねて少しお話をさせてもらいたいというふうに思います。ちょうど今日のテーマは自然と信仰、祈りという事でございますので、うまくマッチしているかなと考えております。

私のレジユメ、最初に熊野信仰の諸相なんて、何か取って付けたような紙が付いていますけれども、何か関心のあるテーマを書き出してくれという事だったものだからちょっと並べてみたのですけれども、熊野三山の信仰とか熊野古道の調査、そういったような事を中心に頭が悪い分だけで稼ごうということ、長年やらせてもらっております。その中でも熊野比丘尼の布教と勧進というのがありますけれども、そういった事を最近特に関心を持ってやらせていただいております。その一環で先ほどの絵解きもあったのだというふうにお考えいただけます。

思います。

それでは本題のほう、川の参詣道、熊野川の魅力という事をちよつと簡単にご紹介をして、皆さんの熊野詣のお誘いになったら有難いなと考えております。熊野詣のルートはいくつかありますけれども、特に中辺路ルートを使って本宮へやって来る。これが中世以来のメインルートなのです。公式ルートとも考えられます。上皇貴族すべてこのルートを使って熊野詣をしております。

そして、本宮から新宮まで熊野川を利用して川舟で下ったわけなのです。そして新宮へ行ってから那智へお参りして、そしてまたほとんどが中世までは元来た道を引き返しています。新宮へ戻ってきて、新宮から熊野川をさかのぼって本宮へ戻る。ですから、熊野川というのが熊野詣のいわゆる大動脈になったということなのです。そこにも書きましたように本宮、新宮間、熊野川を舟で上下したのだという事です。

今日は具体的な資料はもう出していませんけれども、下りてほしい四時間ぐらい掛けて下っています。距離にしてほしい四〇キロ近くです。わりと昔は急流だったのでしようけれども、早く下って来られたわけです。帰りは倍近く掛かっているようです。大変ですよ。船外機がありませんから。昔はさお一本で下ったり上ったりしたわけですから大変です。舟は四〜五人乗りということで小さな舟です。あまり大きな舟は川底が浅いですからつかえるのでしよう。ですから高瀬舟のような平底の舟に乗って下ったということなのです。

ですから、何か丸木舟に毛の生えたような準構造船というのでしようか、そういった粗末な舟だったようです。スキの木で出来ていたみたいです。何か高貴な人の舟は屋形がしらえられていたようです。先ほどの補陀落渡海船とはちよつとイメージが違いますけれどもね。熊野川は日本一流量が多いと言われているぐらいですから暴れ川です。ですから大水の時が結構あるわけです。

それでもかなり無理をして、熊野詣の日程というのは決められているものですから、京都へ帰る日にも決められていますから、わりと無理して舟を出しています。ですから途中で沈没したということも結構記録で出てきます。今回の舟下り事業はそんな心配はありませんので、皆さん安心して乗っていただきたいと思います。そんなことで暴れ川ですから船頭さんの技術というのは大変優れていたようです。

「指舟の体てい、誠にもって絶妙なり」という資料が出てきたりします。昔は、帆掛け舟などは中世まではなかったみたいで、棹一本で上りもさかのぼるといふことだったようです。ですから大変だったと思います。これはだれが運営したかという点、左上のほうに絵図がありますけれども、これは『一遍上人絵伝』ですけれども、本宮のすぐ前から舟が出たのです。本宮の大社の前ですから「御前の津」と書いて「おまえのつ」と読んだようです。そこからすぐ舟が出たのです。

そして右の下のほうには新宮に着いた場面ですけれども、新宮の河原のすぐ前に横付けされたわけですね。そんなかたちになっています。そし

て途中の川下りの様子ですけれども、これは上のほうが下流なのです。棹差が二人乗っています。船頭さんは二人です。上のほうの舟をご覧下さい。小さなお坊さんのような人が船頭さんになっています。恐らくこういう本宮とか新宮を運営する社家といいますが、神社を運営する人たちがこの舟下り、舟の運行を管理支配したのだろうと考えられています。

中世には関所もありました。川下りの関所なのです。二カ所ほど知られています。田長たながという所とか、浅里あさりという所です。一番下にちょっと地図を拡大していますので、だいたいイメージは分かると思います。また後でゆっくり虫眼鏡で見えておいて下さい。

途中に休憩所がありまして、ちょうど中間点ですけれども楊枝川原ようじがわらという所と、御本明神みほんみょうじんという所、だいたい真ん中ほどなのですけれども、そこで休憩をしておるようです。途中の景観が本当に素晴らしくて、山があつて滝が落ちていて、そして奇岩奇石があつて、本当に深い淵があつたり瀬があつたり、実に変化に富んでいます、素晴らしい景観を持っています。

また、おもしろい事に単なる景色だけではなくていろいろな伝説、伝承がここに息づいているのです。後でそのお話をちよつとしましすけれども、いろいろな物語が語られております。当時から舟はずつと乗つたままですから退屈しますから、結構船頭さんがいろいろな物語を語つたのだらうと思います。そういうおもしろい話も後で出てきます。豊かな伝承を持っているのだという事です。

ですから、江戸時代を通じていろいろな画題になっております。特に文人墨客ぶんぼくは大勢舟下りを楽しんだり、あるいは逆にお金も時間もある文人墨客は、「廻つたほうがおもしろいよ」という事を書いているのです。時間を掛けて行つたほうがいいだらうと。そして必ずお酒を積んで乗っています。皆さんもお酒を飲みながら楽しんでいただきたいと思えますけれども、それくらい本当に飲みたくなるような雰囲気を持っています。素晴らしい景観です。

今回の世界遺産の一番の目玉は文化的景観というような事が言われております。自然と人との共同作品という訳です。単なる風景、自然の景色だけではなしに、様々な人間の意味付けといますか、様々な伝承が息づいている、そういうルートでもあります。時間もありませんので二枚目にいって下さい。

ちよつと写真でビジュアルに紹介したいと思えますけれども、主なものだけ簡単に挙げておきました。先ほどの様にスライドショーでやつたらもつともつときれいなのですけれども、まず自然の造詣です。一番、撞木つづき（しもく）山というのがあります。何か切り立つた白い岩がいつぱいとがっているのです。何か中国の桂林みたいだとう人がおりますけれども、鐘をつく木があります。撞木つづき（しもく）といいますが、本宮の鐘木を切り出した山という伝承があります。それで「しゅもくやま」がなまって「しもくやま」になったというこらしいです。

それから②のほうは猪倉ししぐらと呼んでいまして、イノシシがたけり狂ったような背中に似ていますよね、これ。そんなイメージで猪倉と言われております。それから③のほうは陽石といまして、地元では大マラ石と呼んでいます。男性のシンボルにそっくりなのです。笑って下さい。女性が笑うとちよつといやらしく聞こえるのですけれども、本当に大きな、五〇メートルぐらいあります。水の中に埋まれていますので、本当にすごいです。なかなか若い女性の前で説明しにくいぐらいです。ある時「わー、そっくりや」と言った女性がおりました。「お父さんを見たのですね」と僕はフォローしましたけれども、本当にそっくりな大マラ石というのが川の中にあります。

おもしろいことに、その対岸に女性のほうもあるのです。陰石といまして、山の中腹に割れ目ちやんがあるのです。「ちゃん」といったら悪いのかな。岩の割れ目があるわけです。男女が向き合っているのです。ですから、ここに昔、舟を止めると男女のサルが現れて、波が荒くなつて過ちが起こるといふ、そんな伝説まであります。なにかセクハラな話が伝わっています。

⑤のほうは今度ちよつと格調高く「飛雪の滝」といふふうと呼んでいます、本当に雪が飛び散っているような、そんな水しぶきが見える滝です。これは紀州の初代の殿様、徳川頼宣よしのぶさんが名前を付けたのです。なかなか風流な名前です。元々地元では竹谷滝などと呼んでいたようなのですけれども、風流な名前を付けたものです。

(2)のほうは熊野権現の鬼退治伝承がいくつかあるのでそれを紹介します。⑥ですけれども、鬼の手掛石あじろるるひみかけしというのと網代あじろるるひみかけし見上石あじろるるひみかけしというのがあります。網代あじろるるひみかけしというのは鬼の名前だそうです。熊野権現に退治された網代あじろるるひみかけしという鬼が、退治された時に見上げて、「こらえてくれ」と言ったのかどうか知りませんが、そんなイメージの岩なのです。その時に岩に手を掛けてつめで引つかいた。それで鬼の手掛石。つめで引つかいたような白い岩が残っています。それが鬼の手掛石なのです。

⑦が骨島といまして、熊野権現に退治されて切られた鬼の骨だそうです。何か恐竜の骨のような大きなまっ白い岩が川の中にあります。本当におもしろいです。恐竜の骨みたいですよ。それから⑧のほうは、その切られた鬼の伝承にちなんだ岩がいくつか残っています、鬼がまな板の上に乗せられたのでまな板石、鬼が料理された肝石きんし、鬼の肝石とか包丁石とか、まな箸石という箸の形によく似た岩があります。このあたりを釣鐘岩つねがわというふうに呼んでいます。その周辺に伝説の石がいっぱいあるのです。

ここは熊野川で一番深い所です。一八メートルぐらいあります。本当にきれいな所でなかなかダイナミックです。ちよつと真ん中のところが釣鐘の形をしているでしょう。釣鐘状の割れ目が出ています。この岩の割れ目が落ちると、この世の中も終わりだというような事を書いていきます。それぐらいダイナミックな岩が残っています。



釣鐘岩（撮影 大江真一氏）

その隣に行きましたら、昼島というのがあります。⑨番です。これは熊野権現が昼飯を食べた島なのです。川中島です。ちょうど柱状節理の頭の上みたいな所です。上が碁盤目状になっているのです。ですから天照大神と熊野権現が碁碁をして遊んだという伝説の場所なのです。本当に碁盤目になっていまして、一メートル四角ぐらいですか、かなり大きな碁石が要ったと思います。

最後は（3）ですけれども、後白河法皇と専念上人の話も伝わっておりまして、実は後白河法皇はいつも頭痛で悩んでいたようです。二日酔いではなかったと思います。専念上人さんという熊野で修行する立派なお坊さんが居たらしいのです。その人に祈禱を頼んだ。頭痛を治してくれという話なのです。そんな伝説で有名なのは例の⑪番の楊枝薬師堂です。これは京都の三十三間堂の棟木になった、その楊枝の大きな木を出した場所とされています。楊枝薬師堂の縁起というのがあるのですけれども、その場所に薬師堂が建てられたということです。

これで後白河法皇の頭痛が治ったという話なのですけれども、その楊枝、大きな木を出す時に対岸で合図のほら貝を吹いたのです。それが貝持島なのです。⑩番なのです。本当に巻貝のような形の岩が残っています。対岸にその楊枝薬師堂があるということなのです。

⑫番は先ほどの後白河法皇の祈禱をお願いされた専念上人という人が、後白河法皇の頭痛を治すために、この杵石という所へ座って祈りを込めた場所だそうです。川の中にこんな小さな島がありまして、何か杵の形をしているからでしょうか。そういう伝承があります。

それから⑬番目が御本明神です。後白河法皇ゆかりの御本明神というのが昔からまつられておりまして、「これぞ仏の御本なるべし」と、ちよūdō熊野三山の真ん中なのだ、これが仏の道の中心なのですという後白河法皇の歌が残っております。そういう場所です。

それから⑭のほうは「宣旨帰り」といいます。⑯番に飛鉢峰ひはつぼねというのがありますが、ここに専念上人さんが居たらしいのです。屋敷跡があるらしいのです。昔、僕はだまされて登ってきたけれども何もありませんでした。そこに専念上人さんが居た。それで後白河法皇の宣旨を持ったお使いが頭痛を治すように専念上人に頼みにきたが、洪水のためここから引き返したという難所です。

川のすぐ上の途中にこうテラス状の道がずっと横につながっていると思います。これは少なくとも江戸時代からある熊野古道なのです。もっぱら、ここは舟で行き来したのですけれども、陸路もあったということです。こんな絶壁の厳しい所なので、後白河法皇のお使いの宣旨もここで帰ってしまったということで、「宣旨帰り」という伝承があります。おもしろいですね。

先ほどの⑯の飛鉢峰ですけれども、専念上人さんがここにいて、鉄の鉢に縄を付けて、熊野詣の人たちからお金とかお米をいただいたらしいのです。こう下におろしてです。そういう伝説の場所なのです。でも、あるときに、筏師がいたずらで古わらじをそれに放り込んだらしいのです。それで罰が当たって、筏師が、この七日巻という⑮番ですけれども、淵のような所へ七日間も入没してぐるぐる回っていたという、そういう伝説の淵なのです。それが七日巻です。

そんなようにして、いろいろと伝説が渦巻いている川下りのルートです。ぜひとも皆さん、世界で初めての素晴らしい文化的景観を楽しむにやって来てほしいというふうに思います。ちよūdōど時間になりました。失礼しました。(拍手)

酒井 はい、ありがとうございます。白河法皇とか鬼まで登場しまして、いろいろな地名などを、後世の人が付けて暮らして来たかと思えます。

では、最後になりましたけれども、大阪商大の教授で経済地理にお詳しい成田先生からお願いたします。

成田孝三 (大阪商大教授・大学院研究科長) ただ今、三人の先生方から、この我々が話題にしております世界遺産の歴史的、あるいは宗教的、あるいは美術的な意義につきまして適切にお話しいただきました。

私はこういう分野ではまったくの門外漢でありまして、語る資格を持たないのでありますけれども、本学で地域政策学研究の分野に属しておりますので、そういう面から少しお話しして責任を果たしたいと思っております。ここに座っているわけです。

それはひと口に言いますと、世界遺産登録によって私たちはとても大きな責任を背負った、そのことを十分私たちは自覚しなければいけな

い、結論はそういうことなのであります。

お手元の資料にゴチックで話の順序、内容を書いてございますので、それに従って簡単にお話をいたしたいと思えます。

まず最初の「優れた道路交通工学者の述懐」という見出しの部分について。もう二十数年前に京都大学の交通工学の研究室に、三羽鳥と呼ばれた、とても優秀な研究者がおられました。一人は鉄道工学、もう一人は海運ないしは港湾の専門家です。それから三人目が道路交通の権威でありましたが、もう亡くなられました。レジユメには「S教授」と書いてありますけれども、佐々木綱さんというお名前でありまして、この方は最先端の数式を用いて道路交通を分析するという意味では、世界的に評価された立派な先生でありました。

その佐々木さんと私は、二十数年前に「都市交通審議会」という会合がございまして、そこで度々、席を同じくしたのですけれども、あるとき隣に座った先生はとても疲れた顔をしておられ、「熊野に行つて、熊野の山地を歩くと心が癒される」としみじみとおっしゃり、そして「その都度、自分のゼミの学生を伴つて行くんだ」と言われました。私はそういう信仰心に欠ける人間でございまして、「先生に連れて行かれる学生はちょっと気の毒じゃないかなあ」と思つたりしてその話を聞いておりました。

ところが今回、世界遺産に登録されました熊野は、まさに二十数年前に、最先端の科学者である先生が癒しを感得された場所であつたということです。

その世界遺産登録の意義につきましては、本日の基調講演をなさいました酒井先生が指摘されましたし、先ほど小田先生もおっしゃいましたように、まさにこの遺産は世界の人々を心の面から癒し、満たし、蘇らせる、そういう力を持った精神的な遺産であるということです。このような遺産が世界で承認されたことは私達の喜びであり誇りであります。同時にそのことは私達に重い義務を課します。私達はこの遺産を人類共有のかけがえのない財産として保護・保全し、後世に継承していくことを国際的に約束したことになるからです。

次に「推薦資産の価値証明と真实性の証明」の項につきまして。この世界遺産登録をもちうするためには、政府が推薦書を作りまして、その資産がとても価値があり、そして真实性（意匠、材料、技術、文化的景観等）を持っているということを証明しなければいけません。その証明の作成のためには、ここにいらつしやる小田先生とか山本先生がとても努力なさつたと聞いております。もちろん簡単に登録が認められるわけではありませんが、縷々真実であるとか価値があるということを述べているわけです。

その例といたしまして、ここに書いてある五つの事例のうち二点について申し上げます。まず最初に「三つの霊場が参詣道によって結ばれることにより、霊場と参詣道を含む深遠なる山岳景観が、信仰に関連する顕著な文化的景観を形成している」という、この「文化的景観」という

所がとても重要な点であるということ。

世界遺産はたくさんございますけれども、これまでに、文化的な景観として認められた遺産というのは一つか二つぐらいではないだろうかと思えます。この文化的景観というのは何かということですけども、それは信仰にかかわる文化的な要素が長い営みの中で自然の諸要素と一体となって形成した風景だということです。精神性、そして自然、それが結合して出来上がった風景であります。

こういうかたちのあるような、ないようなものを破壊することなく残していくこと、それがとても難しく、重要なことであるというのが第一点です。

それから、事例の一番最後の五つ目に書いてある、この所も少し注目していただきたいのです。「山寺を巡る参詣の道や川に沿って展開する森林の多くは、スギやヒノキを中心とする人工林となっている」ということです。これは中世以来の参詣道の周りにありました林層とは違って、人工化されているという説明です。しかし、それは変革を受けているけれども、遺産としてこの登録では認められているということですよ。

同時に、これらの森林において長年継続されてきた林業は、信仰の山の経済基盤となってきた重要な地場産業である。そこに住み、生活している人々が自分たちの生活を維持するためにやってきた地場産業です。それは自然をある程度変革するにしても、遺産として認められているということですよ。こういう点を念頭に置いて後の説明をお聞きいただきたいと思えます。

レジュメで四番目にゴチックで示した「遺産登録された参詣道の現状と問題点」に移ります。先ほど申し上げましたように、登録されるためにはそれが基準に適合して、優れた価値を持ち、そして偽物ではなくて真実の物である、たとえ部分的な改修は加えられても、その材料や形式や意匠や、そういうものはオリジナルのものをあまり変えていないという、そういうことがずっと証明として付け加えられているわけでありま

す。

たとえば、六つのルートがあるわけですけども、それぞれのルートのすべてが遺産登録されたわけではなくて、著しく改変されたり人工を加えられたような部分はカットされているのです。

最もモダナイズされました「大辺路」、それは紀伊半島の海沿いを通る道路の部分ですが、おそらく過去の参詣道の中で一割ぐらいしか今回の登録には含まれていないだろうと言われております。最もポピュラーであり、多くの人々が通った「中辺路」という道の場合の登録率はだいたい五割ぐらいではないか。最も人々の近づきにくかった「奥駆」という急峻なルートは最もよく遺産として採録されていると言われております。

そういうふうに一概に遺産登録と言われなくても、さまざまな制約、吟味の中で登録はなされているということです。したがって、今後登録にふさわしい状態を維持しなければならない。モニタリングという、登録された遺産が真実性と価値を十分に保持し続けているかということの見直しをやりまして、それを六年ごとに報告しなければいけないという義務も負っているわけでありますから、我々はその細心の注意を傾けなければいけないのです。

ところが、問題は観光客が遺産登録を契機として急増していることです。レジュメには細かい数字も書いてございますけれども、登録直後、二〇〇四年の観光客を一年前の二〇〇三年と比べますと、中辺路の周辺では倍増して一八五万人を数えました。その他のルートにも、ここにございますように、百万単位で観光客が増えてきているわけです。

そういう状態で、先ほど申し上げましたように、非常に精神性の強い文化景観としての遺産を守ることができるかどうか、とても難しい問題かと思われまます。

レジュメの下のほうに書いてございますが、環境法学者D・オドルリ等々、フランスの学者三人が著しました国際的な観点から文化遺産の保護の重要性を説いた基礎的な文献といわれる『世界遺産』（文庫クセジュ、二〇〇五）では、「遺産登録によって観光客が増えることを一概に否定はしていない。それはそれなりに意味を持っているのだけれども、遺産やその周辺の環境に、団体観光旅行が与える大きな圧迫を消し去った埋め合わせることはできるものではない」と言い切っています。

つまり、より好意的な訪問者が単に通過するだけであっても、その数が百万人を超えるような場合には、登録地や歴史的な建造物の劣化要因となるということを、鋭くこの著者たちは指摘しているわけです。

単純に百万が限界であるとかないとは言えないけれども、比喩的に言えば、多数の人々が一挙に押しかけることによって、遺産というものは非常に壊れやすいのだということです。

特に、建造物、例えば大仏殿や法隆寺、そういう所を人々が何万人、何十万人と見ていっても、その建物自体を破壊、傷つけることはないわけです。だけれども、この熊野古道、あるいは聖地、こういう所は人々を通るだけでも壊れやすい、非常にデリケートな性格を持った空間なのです。だから、観光客をどう扱うかということはとても重要だということです。

ここに平成一七年の春に写してきました写真がございますので、ご覧になってください。

写真①は中辺路の参詣道の中の、本当の聖域に入っていく入り口だと一般に言われております、滝尻王子です。入り口正面から撮ったもので

すが、古道にある王子という神聖な感じがよく出ています。

写真②はその裏手に回りまして、この中辺路の一番高い尾根に登っていく参詣道であります。これもまさに熊野古道、その状態がよく表れている道かと思われまます。

ところが、写真③は先ほどの、正面を写してある手前の入り口の所に設置されました表示石ですが、台座を含めましてあまりにも大きすぎて調和を崩しているという印象を受けます。

それから、写真④はその横手にあります案内板です。そして、その横にいくつかの表示の柱が建っております。案内板自身は王子を回って行きますと、皆こういう統一されたかたちで設置されているのですけれども、デザイン、色、大きさ、ちょっと王子にはそぐわない表示板になっている。

またその横の四本の標柱も一番左の一本ぐらいがあれば十分であって、他のものは目障りではないかという印象を受けます。

写真⑤は王子の南、川を隔てた所に建っております町が造りました休憩施設で、案内所と歴史紹介を兼ねています。建物の正面を写しておりますませんが、それは本造で、とても風景にマッチしたい建物建っております。中の展示物も本物ではありませんけれども、なかなか充実した展示がなされております。ところが、私が気になるのは、その側面のポールに記されたこの文字でして、「十万人の熊野詣」とあります。つまり非常に観光志向の、数を増やしたいという目的意識が明瞭に示されている。これは少し問題ではないかというのが私の印象です。

写真⑥と⑦は次の王子に登っていく道の所、この前にバス道路が走っております、この上のほうに「牛馬童子」があります。その入り口にこういう看板が立っておりますが、これも色彩から言っても、このデザインから言っても、表現の仕方が問題であるというふうには私を感じております。⑦の標識の大きさとデザインはまあまあいいのですけれども、同じことを示すのになぜ二本も並べて立てる必要があるのか、もう一本で十分だというのが私の印象です。

写真⑧は牛馬童子へ登っていく参詣道であります。問題にしたいのは、こういう旗が立ち並んでいることです。自動車道路の沿線に広告の旗がいっぱい立っているのも目障りですけれども、この参詣道には全くふさわしくない。おそらく県が立てた歓迎の旗かと思えますけれども、古道の良さを台無しにしています。

写真⑨はちょっと見にくいかもしれませんが、人口植林された樹林です。こういう部分は資産としては許容されているわけです。その中に斜めに走っているのは木製の導水管です。柵田とか、あるいはその田に働きに来る住民に水を供給するものです。こういうものだと人工物であっ



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

参詣道の現状
(平成17年 春 撮影)



①



②



③



④



⑤



⑥

でも、おそらく資産としては許容されているのだと思います。

写真⑩は次の「近露」という王子跡に下りていく参詣道の一部です。ところが、この部分は非常によく道路が補整されまして、歩きやすくなっております。これは文化庁が「歴史の道」を選定したときに、人々の歩行安全を考えてこういうふう人工的に改修したと思われませんが、この部分は資産から除かれているはずで、資産登録というものは、そのように非常に厳密な考え方もあってなされているということです。それを我々はこれからも伝えていかなければいけないという義務を負っているということを自覚すべきです。

写真⑪は山を下りました「近露王子」の跡地であります。ここはもう社は残っていないのですが、やはり、先ほど見たような大きな案内板がありまして、いかにも不調和です。

写真⑫は「継桜王子」の跡地でありまして、左にあるのは紀州藩が立てました案内板、それはもう文字が摩滅して見えなくなっています。そこで明治の二〇年代に新しく作り直したのが、右側の二代目の案内板であります。当時の案内板は、先ほど我々が見ましたような景観と不調和な大きな案内板ではなく、景観に溶け込んだような石柱なのです。私が言いたいのは、こういう配慮が必要だということでございます。

そこで最後に、私たちはどういふふう遺産に対峙すべきかということを少しまとめてみたいと思います。

再三申しましたように、文化遺産は、地元の住民が自然に対応しながら生活の中で継承してきたものであつて、これまで、大々的なキャンペーンとか大規模な開発はそこには及んでいなかった。それ故に、遺産としての価値を保ってきた。それが世界的に認められたわけでありまして、それを細心の注意をもって、我々は将来に引き継がなければならない。そういう合意を国民的に持たないといけないということです。とても大変なことなのですけれども、決意が必要だということです。

それから二番目には、だから安易な集客キャンペーンをやるとか、特に団体客を動員するようなやり方ではなくて、先ほど小田さんが「来られるときには少人数で来てほしい」とおっしゃいましたように、まさにこの価値に触れたい人が自発的にここを訪れるという、そういう場所として我々はこの地域を見るべきではないだろうかということなのです。

先ほどの曼荼羅の説明にもありましたけれども、あそこにもやはり、この聖地に惹かれて来た人たちが描かれているわけです。物見遊山か何かというふうなものではなかったというように、私はあの曼荼羅の説明を伺ってありました。

だけれども、途中に出てまいりましたように、そこでは人々が生活しているのであり、そういう人々は現実の生活を維持あるいは向上させたいという願いをお持ちのではありません。そういう人々の意思、それを尊重しながら、なおかつ、細心の注意を払ってとても重要な資産を伝

承していくという、その両立の道を考えること。それはもう官民一体となって考えなければいけないことなのです。

いかに観光客を動員するかというふうなことを考える以前に、そういうことを考えることこそが我々に与えられた重要な役割であるだろうと思っています。以上でございます。

酒井 はい、ありがとうございます。中辺路という、和歌山からもう少しぐーっと南に下った田辺から東へ入っていく道が一番ポピュラーな道なのですが、写真でみると、世界遺産に登録されている地点での問題、日本人は看板が好きですね。そう思われませんか。看板のない町をつくるだけで意味があるのではないかなという気がいたしますが、調和を考えた上で、重要な、大事な問題を先生はご指摘になったかと思えます。

これで三先生、それぞれにお話をしていたのですが、ご意見をお互いに聞く中でお感じになったことを出していたらと思います。順番にもう一回クルーツと回りますが、よろしいでしょうか。何かお感じになりましたことを……。

小田 「人の声は神の声」と言いまして、私も和歌山県というのは、資産を抱える現地の当事者というふうに考えていただいたらよろしいのですが、実は地元は地元事情というものがあるみたいで、実はもともと私は京都の人間ですが、この世界遺産になる前から世界遺産になっているようなものというのは、当然、尊重すべきものとして資産価値を持っていたわけです。なかなかそういう「世界遺産」というバッチを付けない限りは、なかなか大事にしようという雰囲気がありませんでした。

私も京都から行きましたもので、「もっと大事にしたらどうや」「どうや」とずーっと言い続けていましたら、その度に「県に不満があるんだったら京都へ帰れ」という話を言われまして、歯がゆい思いを二〇年以上やってきたわけです。

その間に徐々にはありますが、先ほどの看板の件で言いますと、「歴史の道」、これは国庫補助事業です。国は、だんだんと全国的に開発が広まっていく中でモーターゼーションが進んでいって、昔の道がどんどんなくなっていくので、国から補助金を出しまして、「調査、ないしは整備費用を出しますからやりましょうよ」という話です。それに比較的早い段階で、昭和五〇年代の初めに着手して、委員会を組みました。

今、たまたま、この熊野古道だけが世界遺産に登録されているようなことがあるのですけれども、実はいろいろな交通関連遺跡、信仰に関する道を全県域にわたって調べまして、報告書を作って、国から「歴史の道」として指定されて補助金が得られますというので、先ほど先生がお写真になった、こんなバカでかい看板が立てられております。あれは国庫補助金で立てられておりますものですから、にわかには撤去できないという、こんなことになってございます。

私どもも、世界遺産に推薦書を出しますと、ユネスコからちゃんと先生方みたいな先生が、外国人ですけれども来られます。来られた途端に、「これ何ですか？」という話です。もちろんイングリッシュですよ。「What is this?」と言うわけです。それで同じような、先生が指摘なさった、「何でこんなバカでかいものがここにあるの」と。「あなた方、歴史的景観、文化的景観が大事だというなら、こんなものさつさとどけなさいよ」と英語で言うわけです。

それから、「同じようなものがたくさんありますよ」というふうなものも、しばしば指摘を受けました。だけれども、従前から補助金をいただいております都合上、耐用年数というものがあります。それをわかにはどけられないという事情もある。ただし、そのユネスコの指摘を受けまして、世界遺産では三県で協議をいたしまして、統一デザイン、自然と一体となった文化的景観にマッチするようなかたちのデザイン、ちよつとつや消しの木を使ったりなんかした、ちよつとかわいらしい屋根の付いたものを、それはそれで決まっています。

ところが、市町村は世界遺産になったうれしさのあまりか何か分かりませんが、「おらが村が世界遺産だ」ということで、ああいう大きな石碑を建ててしまいました。

書いてある文面は私どもが一応チェックしまして、下が史跡でありますので掘ってはいけない。掘削を要する行為というのは一切、許可できないというふうなことになりますので、大きな石なのですが、下にこうチョコチョコと台石が組んであります。あれをどけるともうスポッと、重機が要りますが、どけられるということが最低限、許可の条件ということで、その辺りを私どもの文化遺産課というところでチェックいたしました。国と協議の上、「まあ、しゃあないな」ということで、ああいうかたちになっています。

あそこだけではなくて複数の市町村にわたりまして、大きな「世界遺産登録記念碑」というものが五つほど、目立つ場所に建てております。「どうしようかな」というふうなことであります。

私どもはちよつと言い訳めいた話にもなるのですが、実態から言いますとそういうことでございます。

酒井 それぞれ事情があつたようでありますね、国の金が出ているので。最近、景観法という、景色そのものをきちつと保全していかなければいけないということになりましたね。ご存知ですか。

私は超高層のビルというのはあまり好まないのですけれども、大阪市内で一番大きいスカイビルというのが大阪駅近くに出来まして、そこで先般私は建築士事務所の方の前で話をさせてもらったのですが、実語教の「山高きが故に貴からず」をもじって「ビル高きが故に貴からず」と言ったら、戦前大阪のガスビルを建てた方の関係者がよくその趣旨を理解されまして、江戸時代の大坂の町はずつと家の高さが制限されてい

て、今の御堂筋も道幅とビルの高さの対比で生まれたあの美しさというものはやはり大事だと直接語られました。

それから、看板についてもやはり大きな問題があるのではないかと思います。よその話で恐縮ですが、オランダのアムステルダムへ行ったときに、町はやはり美しいです。ところがちょっと外れて、私が泊まった所は日本の某有名なホテルが建っているのです。景色と全然合わないのです。そういうものをババーンと建てて、ヨーロッパの伝統的景色を壊してしまっていると思いました。地域の景色そのものが文化ではないのでしょうか。

だから、イタリアの一三九条ある憲法の中で第九条に「国の風景ならびに歴史のおよび芸術的家産を保護する」と規定しています。イタリアは二千年前の遺物が目の前にごく当たり前に転がっているわけですから。

そういう点からすると、成田先生は、我々が本当に文化を大事にして、登録されて喜んでワーツとやるようなものではなくて、本当にこれからあと人類の共通の宝として継いでいくという気持ちを持たなければいけないのではないかと指摘されたと思います。小田さんも立場上お苦しいところもあるかと思いますが、良心的な文化部局でありますので、がんばっていただきたいと思います。

それでは、山本先生、これも絡んで地域のいろいろな研究とか、語り部、案内をされる方が熱心に訪れる方を案内しておられる、そういうことも含めてお話しただけですか。

山本 先ほどの案内表示の件なのですけれども、確かにサインが多すぎます。これはいいのか悪いのか、かなり昔から、たとえば地元では「古道ピア」ということをやりました。もう二〇年以上前だと思えますけれども、あと、もちろん「歴史の道」の調査であるとか、最近では「南紀熊野体験博」とか、いろいろな地元への催しをやってきました。

それで、地元住民も意識がかなり上がったといういい面はあるのですけれども、かなり過剰な整備とか、いろいろなサインが乱立するということもあります。

それと、もちろんいろいろな行政体が絡んでいまして、もう文化庁だけだったらいいのですけれども、観光サイド、あるいは建設サイド、そんなことで非常にこう縦割り行政ではありませんけれども、非常にややこしくなっているという弊害もあります。サインについてはそんなところですね。

あと、語り部とかそういうことにつきましても、一生懸命、最近、地元の方も関心を持って、自ら「語り部になりたいよ」というようなことで、よその方がわざわざ熊野まで来てくれて語り部になってくれたりとか、そういう面で意識はかなり盛り上がっていますけれども、にわか

仕込みの方も多いので少し我流になっている方もあったり、あるいはわりとこう歳が行ってからにわか仕込みでやるものですから、少しじつくりやれていないと言いますか、そういうところもあります。

正直言いますと、なかなか熊野古道のガイドというのは難しいのです。体力もないとだめですから。それと歴史だけ知っていてもだめだとう、自然のことも知っていないとだめだ、地域の事情も分かっていないとだめだ。「この植林している木、何ですか」と聞かれて知らなかったらまずいですから。スギとヒノキぐらいは知っておかないとまずいと思います。

あと歴史だけ知っていても自然のことをいろいろ質問されたりとか、地域の事情であるとか取組みとか、そういったことも説明しないといけないからなかなか難しい。苦勞が多いみたいです。しかし最近、本当に意識を持ってやってくれている方が多いのでうれしく思っています。

先ほどの熊野比丘尼の「絵解き」ですけれども、これも僕もいつまでも歳が行ってから格好の悪いことをやりたくはありませんので、今年から養成講座みたいなことをやっています。後継者養成をやっています。もう僕も頭巾を被って、あんな変な格好をしてやっていますので、今年かども、「瀬戸内寂聴より若い」と思っていますけれども、その後継者もなかなか歳が行っていますから、いつべんに頭に入らないのです。

絵解きもあれは結構難しいのです。いろいろなことを知っていないと、シナリオなしでやらないといけないわけですから、即興的にやらないといけない。その場に応じてやらないといけない。それがまた絵解きの極意でもあります。

熊野古道のガイドも同じだと思えますから、そのお客さんのニーズに合わせたような案内をしないとイケない。時間にもちゃんと合わせないといけない。それから、語り部がしゃべりすぎるとい弊害もあります、自分のことばかり言って、知っていることばかり。汽車に乗り遅れたというような話もあったりしまして、ちょっと困る場面もあります。

とにかく、行政もいろいろサポートしながら、地域住民と一緒にやって、これから語り部を大事にしていかなければいけないと思うのです。単なるこれは熊野の観光旅行とは違うと思えますから、やはり先ほどの小田先生の話ではないですけれども、祈りと歴史体験の旅ですから。江戸時代の観光旅行になってから、やはり熊野は落ちぶれていくわけです。

ですから、もう一度、熊野の真髄とは何なのかということを考えるときに、やはり当時の熊野詣の先達というのは道案内をして、いろいろな語りをやってきたわけですから、それがやはり一番良かったのだと思います。そこら辺に熊野の魅力があるのだと思います。それを見直すためには、やはり、語り部の養成というのが一番重要なのかなという気がしております。

僕も十分ではありませんけれども、語り部の養成講座でポツポツとしゃべらせていただいていますので、ちょっと実感があつたと思います。失礼いたしました。

酒井 ありがとうございます。途中ですけれども、みなさんの中で今日熊野のお話しになっているような、昨年登録された地域を一応歩かれたのはもちろんですけれども、別に歩かなくても熊野三山へおいでになったとか、青岸渡寺においでになった方、ちょっと手を上げていただけますか。ああ、大半の方ですね。そうすると話がよく通ずるのではないのでしょうか。ご自分の経験を踏まえて、周りの景観とかお寺とかお宮さんとか、山の姿のイメージを浮かべながらお聞きになったかと思えます。

それから「絵解き」というものをお聞きになった方、ちょっと手を上げていただけますか。ああ、少数。今日からは、全員手を挙げていただくことになるのですね。

私は大阪育ちなもので、絵解きというものをあまり知らなかったのですけれども、三重県へ赴任したときに、鈴鹿市に神戸かんべという町があるのですが、そこで「寝釈迦」の行事がありました。お釈迦さんの涅槃ねはんの日にこの絵を掛けて、住職が説明をされるのです。これはうまいなど、私は初めて聞きました。龍光寺という禅寺でしたけれども、市長さんがお寺の住職でした。

それで、先ほど山本先生がお話しいただいた参詣曼荼羅自体を持って歩いたとか、そういう広がりについても、今まで参詣曼荼羅を歴史家は残念だけでもあまり注目していなかったのです。その辺はどうですか。文化財として今はいろいろな所で特別展示をやっていますけれども。

小田 私は実は美術史が専門でありますので、美術史というのは、いわゆる先ほどの心なり何なりが凝縮された度合いによって評価するという伝統がある。だから、ちょっと言葉は良くないですけれども、俗っぽいものは価値が低いものというふうに従来、世界的にですよ、日本だけではなくて世界の美術史というか、だからルーブルとかそういう所とか、その影響を受けて出来ている日本の美術館、博物館なんかを見ましても、あるいは文化財保護行政自体を見ましても、そういう傾向にあります。

確かに、参詣曼荼羅というのは非常にも素晴らしいものではあるのですけれども、絵画作品として見ると、さらにもっとお金を掛けて精神性を込めて作った、時代の古いものが他にもあつたりしますと、どうしても調べるほうがそちらのほうを先にしてみよう。

国の指定文化財の中でも国宝とか重要文化財なんかになっているような熊野関係、あるいはこの紀伊山地霊場と参詣道、真言宗なり修験道関係の資料を見ましても、だいたいそういうふうなものが多いです。

ですから、むしろそういう美術史と呼ばれる世界の見方から、歴史学者の人たちが、歴史資料、あるいは民俗学をやっている人たちなんか

が、あるいは宗教史という美術史以外の他の分野の人たちがこういう曼荼羅、あるいは唱導という絵解きというか、絵巻物を広げて話をされるというのも伝統的にありますので、そんなものに対して違う、同じ学会でも違うジャンルの人たちからだんだんと、ごく最近ですよ。三〇年は経っていないでしょう。そんなので、だいたいどこにどんなものがあるかというものが研究されるようになってきました。だから少し質も違いますし、どちらもやらなければいけないことだとは思いますが、そういう傾向は確かに、先生のおっしゃるような傾向はあります。

酒井 実際、曼荼羅が発見されても、今までは「大したことはない」というような扱いで、その後ようやく市町村の文化財の保護というか審議会を取り上げられるようになったみたいでした。けれども、世界遺産になったからというわけではないのですけれども、その目で見たらいつばい出てくるのです。巻いてあるのを裏返したら、江戸時代に補修したとか年代が出てきて作製年代がわかる。画像を部分的にグッとアップしていただいたらおもしろいことが解かりそうですね。山本先生のお話にあっただけでも、帽子を被っているとか、服装、本当に表情も豊かなのです。

外国の絵というのは、私はどうも見るところ、王様の絵とかその家族の多いのだけれども、群集（衆）が出てくるというのはわりと少ないのではないかと思うのです。そうすると、曼荼羅というのいろいろななかたちで出てくるし、平安時代の応天門の変を描いた伴大納言絵詞の絵でも出てきますけれども、日本の絵画というのは案外、群集（衆）が画像に登場してきているように思うのです。そういう点では、曼荼羅というのは民衆に教えるのに大変いいのではないかと思う。山本先生、持って歩いた様子とか、大きさとかいようなものは如何ですか。

山本 そうですね。だいたい一メートル五〇センチ四方ぐらいの、ああいう絵なのですけれども、紙で出来ているのです。立派な絵というのは「絹本」という、だいたい絹で出来ているわけですから、紙で出来ていて泥絵の具で描いている。安っぽい絵の具なのです。見たら下手くそな絵です。

でも、かえって、そのほうが取っ付きやすいと言いますか、遠近感はありません。遠い所は上のほうへ描いているのです。近い所は下のほうへ描いてあるのです。遠高低と言うのか、そういう描き方です。でも本当にこう取っ付きやすくして庶民的な、霊場のにぎわい、庶民のにぎわい、そういったものを表しているということで、那智参詣曼荼羅、先ほどのものは三四点ほど全国各地から出てきています。

もう一つ、熊野比丘尼が絵解きをした絵があります。それは「地獄極楽の絵図」です。学術的な用語では「熊野観心十界図」というのですけれども、心を見る十界図、要するに人の一生があって、人間が亡くなったら十の世界へ振り分けられるのです。極楽もあるし、地獄もあります。畜生道もあります。餓鬼道の世界もあります。十の世界があるわけです。真ん中に「心」という字が書いてありまして、「あなたの心の持

ち方次第でどこ行くか分からへんで」とやられるわけです。これはまたかなわないです。そういう絵解きをした。

それが「熊野の絵」というふうに呼ばれておりまして、これは熊野比丘尼が実際に絵解きをしたというのは、はっきりしているのです。これは四四本ほど、全国各地から出てきています。そのうち八本が那智参詣曼荼羅とセットで出てきているのです。八例がセットで出てきていますから、おそらく、那智参詣曼荼羅も熊野比丘尼が絵解きをしたのだろうというふうに言われているわけです。本当に庶民に、特にそういう虐げられた女性たちに絵解きをした。

その「熊野観心十界図」「地獄極楽の絵図」というのは、「女の気になるように絵解きをした」というふうにいわれております。「不産女地獄」なんてありまして、子供を生まない、生めない女性が落ちるとされた地獄があるのです。竹やぶで、竹の根っこを掘る作業があるのです。灯明の灯心で掘るのです。掘れるはずがないです。

あるいは「両婦女の地獄」なんてありまして、二人の女性を持つと落ちる地獄があるのです。男の地獄です。これはエッチな男性は気をつけたいですね。

そういう絵解きをしたら、やはり女性は気になります。そんなので女性を対象に、熊野比丘尼はやはり女性ですから絵解きをしたということなんです。

全国のそういった曼荼羅というのはたくさんあります。先ほどの那智参詣曼荼羅みたいなものがだいたい百点以上、全国から出てきていますけれども、那智参詣曼荼羅は三四本ぐらい、もう三分の一ぐらいが那智参詣曼荼羅なのです。全国の社寺、高野山もあります、お伊勢さんもあります。いっぱい社寺ではそういう曼荼羅の絵解きをしたのですけれども、熊野の那智がもう三分の一を占めている。それだけ庶民に対する布教が盛んであったということが分かります。それだけ皆さん、こう絵になる風景と言いますか、すばらしい絵解きがなされたのだろうと思います。僕のは下手でした。ありがとうございます。(笑)

酒井 山本先生、熊野神社とか、熊野信仰の広がりというのは全国的にみてどうでしょうか。沖繩にもあるということですけども、北はどのあたりまで？。つまり、お伊勢さんがかなり有名ですけども、熊野の広がりというのも広い。それから、「熊野牛玉」というのがありますね。あれは起請文にもなっていますが、それもお願いします。

山本 はい。僕に振られますけれども。(笑) 熊野信仰は全国各地に広がっていますけれども、熊野神社は全国に三千社余りあります。特に沖繩は「琉球八社」と言っています、八社しか神社がないのです。そのうちの七社までが熊野の神様をまつっているのです。

おもしろいことに、先ほどの補陀落渡海のお坊さん、日秀上人という方なのですから、沖繩に漂着しているのです。ただ一人の生還者です。この人は実在の人物です。皆さんもひょっとしたら生還できるかもしれませんから、補陀落渡海はいかがでございますか。その日秀上人が沖繩へ漂着して熊野信仰を広めたという、そういう事例もありました。

この秋、また沖繩へ行くことになっているのですけれども、飛行機で行きます。船で行きたくはありませんので。そんなおもしろい所もあります。

熊野信仰は非常にこうメジャーになって、平安時代以降栄えます。そういう中で荘園、全国各地に荘園が寄進された。その荘園の鎮守としてお祀りされる熊野神社があったり、熊野比丘尼のような人がその土地に勧請かんじようをする。あるいは先達山伏が勧請をするといういろいろなパターンがあって、全国各地に広がります。地方のそういう神社の中では、もう何本の指かに入るぐらい全国的な規模で広がっているということです。

それと、「熊野牛玉宝印」です。お札です。熊野比丘尼がこれを配ったということで、昨日もそれを用意してちょっとパフォーマンスをしたのですけれども、熊野詣のときに必ずいただくのが熊野牛玉宝印というお札なのです。お守り札です。熊野参詣の証明書みたいなものなのです。それを持つていたら三悪道に落ちてでも救われるという、そういうお札なのです。それはありがたいです。

それが非常に有名になりました。それは例の神武天皇を案内した八咫（やた）鳥をデザインした、鳥文字で出来ているのです。それで日本一有名になるのです。ですから、真ん中に「日本第一」と書いています。先ほどの鳥居も「日本第一」と書いていたでしょう。熊野はもう平安時代の終わりから、「日本第一大靈験所」を標榜していきます。それぐらいメジャーになるわけです。

ですから、その鳥文字になったので特に有名になって、裏に起請文を書くのです。「熊野の神様に誓って、一切私ほうそは言いませんよ」ということです。

ですから、徳川家康なんかは天下人を意識し出したら、白山から熊野の牛玉に変えています。豊臣秀吉なんかは臨終のときに大名を皆集めて、「秀頼を頼むぞ」と血判をさせています。

最近あったではないですか。郵政民営化反対の綿貫さんが、熊野牛玉の裏に皆、例の連中、反対派ですか、連中に血判させて持っているのだそうです。「ニュースステーション」でやっていたでしょう。僕は見ていませんけれども。熊野のお札の裏に血判させているらしい。ですから、皆ちゃんと神に誓って反対したではないですか。(笑) おもしろいですね。それぐらい絶大な力を持ったのが熊野のお札なのということ

です。長くなりました。

酒井 あの方は富山県の神主さんではなかったですか。

山本 綿貫さんは何かそういう神社の出身の方らしいですよ。ですから、そういうことを知っていたのだと思います。

酒井 話がおもしろくなってきました。私は江戸時代を調べているものから、それこそ『曾根崎心中』だとか、遊女が心中にするでしょう。あの女性たちが起請文をいっぱい入れたものに入れているのです。男が「お前のためには」と言って、盛んに起請文を書いて渡しているのです。これは江戸時代になると起請文も安っぽくなりまして、その中に熊野牛玉というのがあるのです。

時代がさかのぼるほど、そういうものの持つ意味が大きいですよね。つまり人間が生きていくために、つまり中世・古代にとっては宗教の持っている、真つ暗闇を生きていく力、あるいは真つ暗闇に追い込まれたときに必死に生きていくとしたら、宗教はもう本当に光ですね。そういうものをこの地域が自然の中で育てている。単なる宗教ではなくて、本当に生きるための光を与えてくるのでしょう。江戸時代になるとだいぶ薄れてしまって、今になるともつと薄れているのですけれども。

それでは、古い話はこれぐらいにして、成田先生、これから登録された後、地域の方、あるいは我々、外から行く者もこれをどのように保全していくかという大事な課題があるかと思えますので、よろしくお願いいたします。

成田 あまり大したことではないのですけれども、ちょっと二点ほど。先ほど語り部の話が出ました。私も語り部さんに従って古道を歩きました。その方は名古屋から熊野に嫁いでこられた女性でありまして、もう五〇歳ぐらいになっておられるのですが、とても熊野を愛しておられ、沿道の植生についての知識が豊富で、そして歴史、人文的なことを的確にお話ししていただきました。私はその方に案内していただけたことをとてもうれしく思ったわけです。

そのあと、この会がごいますので、和歌山県の小田先生の所に伺いまして、語り部さんというのはどういうふうな仕組みで成り立っているのかというように伺ったのです。県に登録なさっている人、あるいは自分でやっておられる方、それは組合みたいなものがあるらしいのです。県として特にそういう方々の知識の向上とか、そういうことはやられていない。緊急の事故が起こったときにどういう対処をしたらいいかというふうな講習はやっているけれども、説明の内容自体についてのことはやらずにそれぞれに任せているのだというお話を伺いました。

でも、語り部さんである限りは、誤った、間違ったお話をされるととても困るわけですから、何らかの仕組みでもって、強制するのも問題ではありませんけれども、古道に関する歴史や自然に関する講習みたいなものを、自発的に受けていただくにしろ、何にしろ、公的に県として

やっていたら、語り部さんの質の向上を図っていたらということも大切ではないだろうかと思います。

それから、コストですけれども、おそらく個人的に語り部さんに付いていただくと、とても高くつくと思うのです。だから、個人的に申し込んでもそれをプールして、ある一定の時間にまとまって一〇人とか二〇人とかで案内していただくと、一人当たりのコストは安くつくわけです。ぜひ、そういう上手い仕組みを作っていただきたい。なるべく有意義に古道を歩くためには優れた語り部さんに付いていただくということが、とても意味のある重要なことなものですから。

もちろん事前に、自分で十分に勉強して行ってもそれはいいわけですが、そういう時間もなく、正確にきっちり古道を学びつつ歩きたいという方にとっては、その意味はとて大きいだろうと思います。

それから、「団体観光はなるべく自粛し、控えめにして」というふうなことも申し上げたのですが、有力な産業のない和歌山県が観光立県と言いますか、観光を重視して県政を発展させたいという、そういう意向を持っておられることも十分理解できることです。だけれども、一生懸命大規模観光をやるのは海岸部で、いくら宣伝をし、いろいろな店を出しても差し支えないそういう部分と、こういう古道のような部分とをうまく使い分けてやっていただきたいというのが私の希望です。

本日この世界遺産班に在籍し、その班長さんであります小田さんの話をお聞きし、先日お会いしたときもいろいろ伺ったのですけれども、小田さんの立場と、それから県が推進しておられる観光推進政策とはちよつと食い違っているなあとという感じを私は抱きました。小田さんにとってはとてもしんどい、つらい立場におかれることになるかと思えますけれども、ぜひ、がんばって世界遺産を守っていただきたい、そういうふうにしては小田さんに強くお願いしたいということです。

酒井 それでは、壇上の我々が話をさせていただくのはこれくらいにいたしまして、まどめは特にいたしません、会場の皆さんのほうからお話の内容とか、あるいは具体的な登録された場所、その他についてご意見、あるいは古道への思いについてございましたら、積極的にご遠慮なくお願いしたいと思います。手を挙げていただけますか。

総合司会 ご質問がございましたら係りの者がマイクを持ってまいりますので、手を挙げていただけますでしょうか。

質問者 世界的に有名になったということで、今の観光の面と、それから遺跡と言うのですか、その保存の面と、この両立をどういうふうにしていったら一番いいと思われませんか。

小田 システムから言いますと、それぞれの資産がありますね、それで市町村があるわけです。国のいわゆる、世界遺産の資産である以前に国

の史跡になっておりますので、それぞれの史跡につきましては市町村が直接管理をするというシステムになっております。県はそれを指導して重要なことは国に進達するという、これがいわゆる世界遺産を守る行政のシステムであります。

それは、実は教育委員会が文化財保護法に書いてございます「権限委任」というものがありまして、都道府県の教育委員会にそういうものを委任するというふうなことがちゃんと書いてあります。

県の行政というのはそういう教育委員会と知事部局と言いまして、一般の土木だとか観光だとか何だとかとやる所がありまして、それを一般的に知事部局と言っているのですが、和歌山県の場合、その知事部局の地域振興課という名前そのままの課なのですけれども、その中に世界遺産班というものが実は出来ました。

私どもの所は文化遺産課調査班、保存班というものがあって、もう一つ世界遺産班というものがあって、三本立てになってもっぱら、だから成田先生が言われたような観光による圧力というものから、あるいは開発による圧力というものから世界遺産そのものの価値をこうプロテクトする……。

最初、英語で酒井先生が言うから、私に移りましたんですが。(笑) ガードする、そういう最前線でやっております。ですから、知事部局とうちの教育委員会で、実は県という一つの中でどっちが抵抗勢力と言っているのか分かりませんが、お互い紳士的な話し合いなので、目指す所、ベクトルが少し違うということがありますがあります。

ただし、徐々にはありますが知事部局の人たちも、これは知事の命令であったのですが、実は世界遺産絡みのところで、県の、しかも民間の人がやったのではなくて県費の事業で世界遺産の木を刈り込みすぎたり、そんなことが実際にあって、それが新聞に書かれたことがあったのです。それで、うちの知事が知事部局の人たちに「何ちゅうこっちゃ」という話を、分かりやすく言いますとね。それで各部署に「世界遺産連絡調整委員」というものを置けと。

今までだったらそれぞれの部署が、たとえば道路計画だとか何やら計画だとかたくさんあります。そういうふうなものについて独自にやってきたし、市町村についても、それも国の補助金絡みでいろいろなことをやっておりますが、もう万が一、世界遺産に影響が及ぶことがあってはならないということで、計画段階から、もう煮詰まった段階ではなくて、「もうここへ絶対に道を通さなあかんのや」というそんな段階ではもういけないので、ちょっとでも、民間でも何でもいいから、そういう情報があったら各分野で、何と言うか、お庭番、違う、何と言うか……。だからリーダーみたいな、アンテナみたいな役目をきっちりするようということ、それで私どものほうからもそこへ行って、世界遺産とい

うのはこう大事で、こういうシステムで世界遺産条約があつて、こうこうなっていますよというようなことを説明するようなことになってきました。

それが出来てから、本当にもうかなり早い段階から、たとえば「ここへ道を付けるのは大丈夫ですか」という話が入ってくるようになります。そういう意味では円滑。結局、県の知事部局の行政マンも結構、皆さんまじめな方が幸いに多くて、世界遺産の大事さというのはやっとな……。道を直したり、何かしていかなくてはならないのです。だけれども、その中でやはり「世界遺産を尊重しよう」という気持ちが出て、これが世界遺産効果のものすごく大きなことです。

だから、さっきから言いましたように、資産というものはもともとあつたもので、世界遺産に登録するからといって増えたものではないのです。そのものの大事さも絶対値というのは同じなのです。それが世界遺産に登録することによって、それだけに、本来の価値に基づいてナーバスな対応をしていただけられるようになった。それは非常に大きいのではないかなというふうに思っています。やたら看板を立てるとするのはちよつとあれなのですけれども、だからその辺りをもう少し……。

あと、市町村との連携というものがやはりちよつと手薄かなというふうなので、今、市町村合併というものが実はありまして、前までだとたとえばこの中辺路というのは四つの、五つかな、本宮町という、本宮というお宮がある所と、それから中辺路町といって中辺路の、田辺から東へ、山の中へ入っていく古道がずつと通っている所と、それから大塔村という村があります。それから高野山と熊野、中辺路の間の龍神村、温泉で有名な龍神村というものがあつます。そこが田辺市という紀伊半島の西岸に位置する中核都市なのですけれども、そこを合併したといふかたちになりました。

実は、今度、世界遺産に登録されるので、それぞれ道とか王子跡なんかを史跡としてちゃんと地元が、先ほど言ったように国のシステムで市町村が管理していかなければいけないということになりますので、しかも、「年によって担当が変わるといふのではなくて、ちゃんと史跡の専門的な知識を持った固定的な職員さんを置いてください」ということで、教育長が各市町村を回りにまして、それで町長さん以上に直接会ってお願いするということになっていました。

そのシステムが始まった途端に市町村が合併した。だから、田辺市なんかだったら四つか、市町村が合併したもので、合併しなかつたら、世界遺産絡みで四人か五人の専門家を置けたわけです。今、市町村合併をしたから、一つの市町村だと言っていたのだから一人で済むわけでしょう。そんなことも起こってきている。「それはおかしいのと違うの」というふうなことなのだけれども、なかなかこのご時世ですので、人員確

保、まして文化関係の所へ人間を配置するなんていうことは難しいことになってきています。

だけでも、これから、先ほどの先生のお話にもありましたように、モニタリングとあって、「資産価値がちゃんと損なわれずにキープ、維持されていますよ」ということを定期的にユネスコへ報告することになっております。

それも、やはり現地の人で、一〇キロも二〇キロもあるような道をいちいち和歌山から行って、そんな毎日監視しているわけにはいきませんから、だから、そういうふうなことでも地元の力がすごく大事になってくるのです。それをどうしようかなというふうなことで、必要性はもうひしひしと、当事者でするので感じてはおります。

ちよつともう三分ほどいただきますと、実はこれはフリーで登録されたわけではありません。これだけ広大な特色のある文化的景観を伴う資産なので、「そのわりに保存管理計画がええ加減ではないですか」と言われました。ユネスコから二年以内、だから来年が期限なのですけれども、ちゃんとした保存管理計画を作ってユネスコに出してくださいということになって、今日ビデオを忘れてきたのも、昨日まで三重県と奈良県とでその詰めを、もう膨大な六〇ページぐらいの細かい、これはどうして、ああしてというふうなものを今決めにかかっています。それをまた英訳をして、ユネスコへ来年の二月までに出さなければいけないことになっています。

その基礎になる、さらに細かい市町村の保存管理計画を、市町村の数少ない担当者を集めて九月ぐらい、もう来週、再来週ぐらいにその原案が出来ますので、それを提示して、さらにもう少し細かい、きめ細やかな保存を中心とする保存管理計画を作っていきます。

やはり、原発の事故ではないけれども、きっちりしたマニュアルがないと、すぐ「あんたとこ担当やからやりなさいよ」と言ったって、そんな市町村でなかなかできるものではありません。ましてや、専門職員を十分に配置させている状況ではありませんから、マニュアルをやはりきっちり作らなければいけないということで、今、性根を入れてやっているところであります。

ですから、全部が全部こうマイナスのベクトルに向いているわけではないのですが、いいほうのベクトルというのはそうすぐに、スピードが遅いなあととは自覚しますけれども、その辺りでまた皆さん方の援護射撃もしていただいて、それぞれの地元の町にちゃんとした人がいてくださるようになったらいいなあと思っております。

酒井 ありがとうございます。他にもうお一人ぐらい、いかがでしょうか。

総合同会 後ろの方、お願いいたします。

質問者 ちよつと基本的なことなのですけれども、この紀伊山地の霊場と参詣道、こういうことで世界遺産に登録された。そうされたという具

体的な所はこの六つの参詣道と、それから、この山本先生の川の参詣道の、「熊野川の魅力」というようにいろいろ神社とか仏閣が載っていますけれども、これが指定されたら、こういうことですか。

小田 山本先生のお話が出ましたので、山本先生のレジュメの半ページ目をめくった次の所に小さい紀伊半島の地図が載っていますけれども。

質問者 載っていますね。

小田 それをちよつとご覧いただきます。余計なものも書いてありますが、奈良県、三重県とか何とか書いてあるから余計に分かりにくいのだけれども、まずは「三つの霊場」ということですね。

質問者 はい。

小田 吉野、大峯、もともと史跡で、史跡名勝吉野山という広い範囲が史跡になっております。それから、高野山のほうは金剛峯寺境内ということで高野山の金剛峯寺、山の上にあるお寺の中心的部分が国の史跡になっております。熊野へ行きますと、熊野は熊野だけ「熊野三山」になって、少し、二〇キロ、四〇キロ隔てて熊野の三つの神社と寺院があるというふうなことです。それぞれの所が歴史的関連性を持っているということで、史跡熊野三山ということで一つの史跡で登録されています。

それプラス六系統の参詣道ということで、ここ今の図面にありますような、本宮はおへそみたいな場所ですので、伊勢から来る道とかさっきの中辺路だとか高野山から来る道だとか、大峰を越えて来る、皆がたい本宮に集まりまして、そこを中心として六系統の道が史跡に指定されております。

その周りが、たとえば道ですとバッファゾーン、道の片側五〇メートルずつ「みだりに開発してはいけませんよ」という許可制の、届出制ではなくて、やった後、「しましたよ」ではなくて、あらかじめ市町村長さんに届出をしてそういうことをしていいか悪いかを聞いてから、許可を得てから「してもいい」という範囲を道の両側、道幅はだいたい九〇センチから一メートル五〇センチぐらいあるのですけれども、その両側は山林が多いですが、その範囲についてずっとこうバッファゾーンということで規制を掛けている範囲です。

それから、霊場については不定形、神社とか寺院の境内が多いものですから、もともと形が丸いものではないので、それぞれがこういう形をしているのですが、そういう史跡の周りの相当広い範囲について、とにかく保護できる法律で許可制であれば使えますので、かなり広い範囲をバッファゾーンとして保護規制を掛けているという状態であります。

ただ、この紀伊山地の霊場と参詣道というのは、この紀伊山地自体の神聖なる山岳景観を土台として育まれたそれぞれの霊場であり参詣道で

あるということなのです。

ところが今、山並みの上に風力発電を作るという計画というものが随所で、今のニューエネルギーとか何とかいうので起こっています。そこは実はまったく規制区域外なのです。それに対する対応というのは、今のところ法的規制を全然掛けられない状態なのです。あと産廃です。だから、それをどうしたものかなというのが……。だから、私どもがもう、むしろヒヤヒヤしているのはその辺りです。野放し状態の地域が圧倒的に広いものですからどうしようかなと。

産廃の話は中辺路町という熊野古道沿いに、熊野古道から見えるかなり山の上のほうまで産廃処理場が出来てという話があったのですが、それも地元の人から情報が入っておりまして、ただし、県では規制区域外で、許認可手続きも先例から照らしてみると何ら拒否する理由はないというので、一時あわてまして、担当課の人が許認可のために押さなければいけないハンコを持って、一日中、県庁の中をうろろしななければいけないというような話まで起こっていた直前まで行きました。

だけれども、町のほうがその土地を地元から買い上げるといふかたちで、かろうじてその場所だけは産廃が防げたのです。

ところが、そこはたまたまうまくいっただけで、今や、いろいろな所で風力発電の、「わあ、ここは紀伊山地でええとこやなあ」と思ったら「何か回ってるなあ」というようなかたちになりそうな所が何か所かありまして、特に世界遺産に近い所でも計画されておりまして。某電力会社ですが、それについてはもう県が一丸となって何とかできないものかなあというふうな話です。

クリーンエネルギーも大事だし世界遺産も大事なのでという、いいもの同士がぶつかりあってというふうなことが起こっています。それ以外に、むしろ逆にそういう範囲に史跡とかになっていて、バッファー・ゾーンになっていっているような所というのは逆に規制の基準があるのでまだやりやすいのです。

だから、そういうときに県でそれぞれいろいろな立場があるので、なかなか一方的なことを貫きにくいのですが、外野のほうから言いますか、だから先ほど「人の声は神の声」と言いましたけれども、世間の人たちが「何ちゆうことすんねん」と言ってもらえるようなことにしない限り、なかなか……。

だから、ちょっとマスコミのほうへ情報を内緒でお教えしたりしまして、がんばっておるようなことなのですけれども、そんな状況であります。お答えになっていますか。

質問者 だいたい。では、地域で高野山と吉野、それから吉野の大峰、それから熊野三山、この地域がだいたい指定になっているということ

すか。

小田 そうです。それをつなぐ道ですね。

質問者 それとつなぐ道。確かに、私はたまたま奈良に住んでおりまして、吉野なんかよく行くのですけれども、実際、一番は熊野ですね。それに沿って、具体的に言いましたら吉野の奥千本から先に、もうずっとこんな立派な林道なんかも出来ているのです。だから、あれを考えたら、あれを造ったのはどこか県か市か知りませんが、公共のそういう人たちがやっているわけですから、そういうこと自身を、そんなことを県や市自身が、公共団体がそういうことをすること自体が僕はおかしいと思う。

また、登録になる前からあるのでしょうけれども、高圧線なんかも通っていて分景観をやはり壊しています。これから、やはりそういう所、そういうふうに世界遺産になったのですから、私らもそういう景観を壊すようなものは注意を促すようにしたいと思います。ありがとうございます。

小田 はい。援護射撃をどうかお願いしたいと思います。三重の先生がおられるのですけれども、多少こう奈良県、三重県と和歌山県の温度差も違うところがありまして、これは三県にまたがる稀な文化遺産ということで、一つの試験台みたいな、試行錯誤みたいなところが……。実は先例がありません。それでちょっと……。だから中にはそういういろいろな行き届かない現状を見て、「早く登録しすぎたのかなあ」なんて言う人もあるのですけれども、僕が思うに、登録していなかったらこれだけ、さっき言ったように歯止めも掛けにくいというふうなことになると思います。

僕は和歌山に行ったのが二〇年ちょっと前なのですけれども、もう情けない話なのだけれども、そのときのほうがまだよく残っていました。だからもう、僕自身もいくら言っても「京都へ帰れ」と言われるし、この世界遺産というふうなことというのが、これは本当に何とか天から差す光のような感じがいたします。

確かにマイナスベクトルの効果もあるのですが、それに引き換えプラスのベクトルのほうの効果も……。これは県費をいくら使ってもおそろしくこんな効果は出ないというようなぐらいのこう、やはりマスコミの影響はすごく大きいです。

だから、NHKなんかも一日番組をテレビで流してくれていましたが、あれはこっちから金を積んで県が「こんな事業をやってるんでお願いします」と言ったって、そんなもの絶対に組んでくれませんでした。

TBSが、世界遺産の番組を日曜日の夜一時頃からやっていますでしょう。ずっとあれで、いわゆるNHKがリードをずっとされていたわ

けです。それで「世界遺産に目を付けてちょっと挽回しようかいな」というタイミングと登録が実は一致したということもありまして、それで一日番組になったのだけれども、内容はもうはなはだお粗末なものでありまして、私はもうビデオを入れながら途中で消してしまいました。だから、付け焼刃でやるからそんなことになると思うのだけれども、それにしましても番組の効果というのは本当に、県費で事業をやったら何億とさかないのではないかと思うのです。それぐらいの効果は、徐々にですが上がってきました。

和歌山県の現地は少子化、高齢化がずいぶん分進んでいる所です。ですから、登録されてからそれぞれの地域の雰囲気はすごく、お客さんが来て「トイレが少なくてかなわんわ」とかそんなことはあるのだけれども、地域の、地元の全体としての雰囲気はやはり明るくなりました。今、和歌山中が明るいのと違いますか。これは山本さんはどう思うのか知らないけれども。

だから、そんな効果もあるので、僕自身はやはりいろいろな問題があつて、急ぎすぎたかなという反省もないことはないですけども、したほうの、いいほうが多いかなと思います。

成田 いま言っておられますように、行政のほうではとても苦労なさっているわけですけども、昨年でしょうか、県とJ.Rが共同で観光、熊野遺産のキャンペーンに三億円掛けてやったと言われているわけです。

それはそれなりにある部分では効果を生んだのでしようけれども、ここで先ほどからずっと論じられておられますように、非常にこの遺産というのは世界の人類共通の、センシティブな保護しにくい遺産であつて、それだけに貴重な遺産であるという、そういう内容をもっと国民全般に、皆さんに知っていただく。教育していただく。そういうキャンペーンを一方で大々的にやらないと、行政がいくらがんばろうとしても、ここに訪れる人たちの心構えがやはり大事なのです。だから、私は一方ではそういう教育キャンペーンをやるべきだというふうに思っております。

酒井 ありがとうございます。答えが出たような気がいたしますが。

質問者 ありがとうございます。

酒井 実は今日、皆さん、熱心に多数参加していただいたのですが、私自身、非常にいい会合だったかなあと思つていっています。それで、登録してから一年経つたのですが、何らかのかたちで、この県とか市町村の持つ責任はもちろんありますけれども、外から行く者もその地域の抱えている問題を皆で担いながら、実態をよく知り、文化の意味も理解して伝えていくことが必要ではないかと思うのです。

それで、今日のシンポジウムはもうこれで終わりになるのか、もう一回ちょっと、もっと深めるといふようなことか、ご意見を、ひと言でも

ございましたら参考にさせていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。私は一発勝負というのはあまり好まないのです。やはり、三回ぐらいやらなければいけないと思うのですけれども、いかがでしょうか。

質問者 先ほど、訪れる者が気をつけなければいけないということで、当然そういうことだと思うのですけれども、しかし、行政とかいう所でも、たとえば景観条例とか……。

我々が海外に行きますと非常にすばらしい、それが何も世界的に有名だというふうなことではなしに、町の中を歩いておりましたが、これは建て替える場合も自分の家であるけれどもそのままにはならないと。色彩から高さから、その町の、例えば、イギリスのある所に行きますと、公園がどれだけなければいけない。そこに建てる建物の色彩はこうですよというふうなことがちゃんと決められている。私を案内してくれたのは景観の設計者だったのですけれども、そういうふうなことがちゃんと決められている。

もちろん、我々はそのを訪れる場合には、それだけのマナーはちゃんと守らなければいけないのですけれども、やはり、ただやみくもに何でもいから建てると、建てていいよというふうなことではなしに、そこら辺のところをもっと民度を高めるような、そういうようなことをやはり行政のほうも、今までどちらかと言うと、一般の民のほうから言われたら言われるままにしてきたというのではなしに、そこでもっと強力なリーダーシップをもつて、これからそういうふうなところでやはり国民性というものを高めていかなければいけないと思います。

今日、私もこのシンポジウムを聞きながら、プロテクト、それからコンサーブと、もしもこれが守られなければ、この世界遺産は取り消しになるのかなということを考えながら聞いたのです。やはりこれをもっと高めていくというか、話し合ってもうちよつと実りのあるものに、ただ一回で終わってしまうというふうなことではなしに、引続きされたいのではないかなと思います。

酒井 はい、ありがとうございます。時間ももう五時をちょっと過ぎたかと思いますが、これで終わらせていただきます。最後に非常に貴重なご意見をいただきました。民度というか、我々自身がしっかりと世界遺産というものの意味を考えて、周りの環境も含めて住みよい地域、社会づくりをということかと思えます。

先生方にも十分司会が行き届きませんでしたけれども、ありがとうございます。また皆さんも長時間、途中でプリントが足りなかったりビデオがなかったりして申し訳ないことになりましたけれども、内容的にはちょっとお土産ができたかなと思いますので、もし商大さんが次回、何か企画されましたら、また引続きご協力をお願いしたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

総合司会 皆様、ご清聴ありがとうございます。本日のパネリストの先生方にもう一度、大きな拍手をお願いいたします。(拍手) ありがとう

ついでにしました。

(平成一七年九月三日開催、於 大阪商業大学ユニバーシティホール蒼天)

